

昭和ノスタルジー

幼な妻甘々調教

初心な果肉に沁み込む官能と悦虐



濠門長恭

目次

熱愛演出	
贅嫁調達	
初夜調教	
新婚旅行	(一日目)
新婚旅行	(二日目)
新婚旅行	(三日目)
調教生活	
性技指導	
夏季休暇	
鞭打折檻	
酒席接待	
夜伽失態	
肛姦熱望	
花電車芸	
年始年末	
泡踊講習	
レズ実習	
拷問事始	
社員旅行	
性愛指南	
早熟義妹	
後書き	
	三〇九
	二九七
	二八三
	二七〇
	二三〇

ここまでは、製品版にのみ収録です。

拷問事始

三月にはトルコ嬢のテクニクをひと通りは覚え、菊枝が知る限りの、女を逝かせる技も仕込まれていた。

その間、苦痛系の調教はなおざりにしていた。睦菜の歳でマゾ女として完熟させるのは尚早だという想いがあったのも事実だが――男としては、キタ・セクスアリスにばかりかまけているわけにもいかない。

無任所課長であっても、年度末はあれこれとケリをつけないといけない事案もある。加えて、落成した新居への引っ越しも間近に迫っていた。

家具選びは使い手の意向を重視するから、睦菜とのデートになる。春先に相応しい服を新調してやって、スカート丈を膝上十五センチに留めたから、下着は画鋲ブラジャーと張形付きパンティと淫核リボンになって、家具屋では上の空だったが。

家具選びは、そんなに手間ではなかったが、拷問蔵には時間も金も手間も掛けた。まさか、モダンな洋風住宅の裏庭に土蔵というわけにもいかないから、大きなプレハブの物置小屋を作った。防音構造で冷暖房完備、水回りも調えた贅沢な物置だ。小道具の収納棚や、拷問台に使う梯子、水責めの大盥などは先に運び入れておき、落成の一週間前からは、母屋では大工が仕上げに大わらわの中、プレハブ組立の作業員とも違う職人がこっそりと出入りして、三角木馬と磔柱を組み立て、天井に走行式の電動ウインチを設置した。

準備万端を調べて四月吉日に、僕と睦菜は新居に移った。菊枝は予定通りに御役御免だが、通いの家政婦は手配してある。家政婦協会から派遣される本物だから、彼女が家にいるあいだは睦菜も露出過剰の若奥様くらしいの服装をすることになる。つまり、裸エプロンはおしまいということだ。

引越した当日。それまでは睦菜にも秘密にしていた拷問蔵の中を見せてやった。天井のウインチから垂れている鎖と磔柱はすぐに理解したものの、三角木馬には不思議そうな顔をするだけで、使い道の見当もつかないようだった。

「じきに、すべてを体験させてあげるよ。ここにある道具立ては、睦菜のために誂えた物ばかりだからね。けれど、今すぐじゃない」

拷問蔵の柿落し（けいのおと）と睦菜のSM仲間へのお披露目をかねての催しを企画していた。僕が参加しているサークルは、三つある。それぞれの愛奴を提供して（単独の参加者も交えて）責めを愉しむだけでなく全員で使う『土鈴愛好会』と、純粋に緊縛美を追求する『愛縄の集い』。そして、明治末期から連綿と続く『古武術研究会』。古武術とはいうが、捕縄術が主な研究対象で、それに拷問術が加わる——といえ、何をしているか想像がつこうというものだ。しかも対象は『女囚』に擬されるから、陵辱が含まれることもある。

今回だけでなく、年に二度か三度は『古武術研究会』に、この拷問蔵を睦菜ともども提供しようというのが、僕の目論見だった。三角木馬は責めの限度をわきまえないと女性器を回復不能なまでに破壊するし、長時間の磔は鬱血が生死に係わってくる。経験豊富な先輩の指導よろしきを得ようというわけだ。

その会合は、五月の飛び石連休に催した。三日の午後から始めて、四日は中休み、五日

の午前中に再び拷問をするという——睦菜も僕も、新婚旅行以来のハードスケジュールだ。新婚旅行での緊縛や露出がおま、ま、ごと、に思える厳しい責めになるぞと、睦菜に引導を渡しておいた。同時に、僕自身も愛修羅の道をさらに遠くまで行く覚悟を新たにす。

当日の来訪者は五人。『古武術研究会』六代目会長と、四人の賛助会員は二十六歳から五十七歳まで。二十六歳はともかく、他の三人は家庭を持つてゐるだろうから——家族サービスを擲^{なげ}つて馳せ参じた筋金入りの鬼畜あるいは雅人ということになる。

訪問客には母屋を素通りして拷問蔵で待つてもらう。事前に『女囚』を見せない配慮だ。

睦菜には午前十一時に軽く粥を食べさせただけで、昼食は抜かした。燃料満載の戦闘機がうまく戦えないのは、男に限った話ではない。

十二時きっかりに、睦菜を着替えさせる。不意の（研究会以外の）来客に備えたおとなしいワンピースを脱ぎ捨てて、鎖の貞操帯と手枷足枷を嵌めて、股下ゼロセンチの胸元を大きくえぐったノースリーブワンピースというか、ランニングシャツ。西洋では、これをタンクトップとか呼ぶそう。暑苦しい鉄の箱の中で戦う戦車兵の軍装が由来だとか。

手は背中にまわして手枷をカラビナ（開閉式の金属環）でつなぎ、足枷には五十センチの鎖。首には市販の大型犬用の首輪。僕も赤い六尺褌一本に装いをあらためてから、首輪につないだ鎖を引いて、睦菜を勝手口から花道へ引き出す。

隣家から覗かれる心配はない。表庭は開放的な洋風のフェンスで囲ってあるが、裏庭には高い板塀を張り巡らしてある。僕はゴルフも嗜むが下手くそなので、ネットの外まで打球が逸れることがある。実際に（わざと）ボールを板塀にぶついたりもしている。

物置小屋に偽装した拷問蔵の扉を開けると。大道具類を壁際に寄せて作った広い空間に大きな半円を描いてパイプ椅子が五脚。サディストが五人。会長だけが黒の六尺褌、四人の会員は白。四十五歳の会長と二十六歳の新入会員は引き締まった身体をしているが、あとの三人は標準体重を軽く超えている。入会金と催し事の参加費だけでも、並のサラリーマンでは手が届かない。まして、月々に会費を払っている賛助会員となると、それなりの社会的地位にあるから、否応なしに恰幅が良くなってしまう。他山の石として、僕も精進に努めるとしよう。

睦菜は、他人の体型など観察するところではない。これまでに経験したことのない、おどろおどろしい雰囲気、身をすくめている。

五脚の椅子の後ろと扉の横と、二台の本格的八ミリカメラが三脚で据えられているのだが、そこらはあまり気にしていないようだ。花電車の修業で、羞ずかしい姿を撮影されることには免疫がついている。

「お待たせしました。僕の愛奴であり、女囚第六十三号でもある睦菜を紹介します」

六十三というのは、初代の『古武術研究会』から通しての女性会員の番号だ。会員というのは適切ではない。戦前には、当人の意思に反して（拷問の実践を伴う）モデルにされた女性も少なからずいたという。今の世の中だったら犯罪行為になるような若い女囚もいた。実際に、そんな写真を見せてもらっている。

そういう由緒ある残虐の場に、睦菜を突き飛ばした。

「きゃっ……」

足をもつらせて床に身体を打ち付ける睦菜。体育に使うマットが敷いてあるから怪我は

しないが、驚くとともに、あらためて恐怖を感じているだろう。なにしろ、これから何をされるか知らされていないのだ。僕自身、「あれはするかもしれないし、しないかもしれないが、これだけは絶対にしない」くらいしか知らない。いつもいつもシナリオ通りの責めでは、マンネリになってしまう。

半円形に並べられた椅子の中央で、会長が立ち上がる。右端に座っていた最年少のS氏が三脚上とは別のハンディ八ミリを持って、会長の斜め後ろに位置取りをした。

「では、お好きなように料理してやってください」

睦菜を引き渡して、僕は会長が座っていた椅子に座を占める。

「新婚気分で、ずいぶんと甘やかされてきたようだな」

会長はうつ伏せの睦菜を膝で押さえつけて――着衣を引き裂いた。服を脱がされるのは慣れている睦菜も、ここまで乱暴に扱われるのは初めてのことだ。

この日に備えて責めを手控えていたから、鞭痕ひとつない白い肌が露出する。

「刺青も無ければ、焼き印も無し。煙草の火を肌に押しつけられたことさえないらしいな」

睦菜の顔が引き攣った。これからはそんなことまでされるのかと、怯えている。

「今日のところは、飼主であるK君に免じて、永久に痕が残るような責めは控えてやる」膝で押さえつけたまま、手枷と足枷をはずす。髪の毛をつかんで睦菜を立たせる。

「この鎖が邪魔だな。鍵の数字を言え」

カメラが睦菜の腰をわずかに隠しているナンバー錠を狙う。これを開けなければ、鎖の貞操帯をはずせない。

「言え。ここを魔羅で可愛がってほしければ、素直に白状しろ」

今回の集いでは、僕からの希望として性的陵辱も『あれはする』に含まれている。結婚して一年近くが経ち新居も構えたのを機に甘々気分を刷新、ハードな調教に切り替えていくつもりでいるのだ。

睦菜が目で僕にすがりつくのを無視して、会長に白々しく尋ねた。

「念のためにお聞きますが、コンドームは着けてくださるのですか？」

「笑止。それでは胡瓜や大根を突っ込むのと変わらんではないか」

だから、女囚を責めるのは安全日に限っている。それでも女は妊娠の不安は拭えない。本物の構合いとはそういうものだ——というのが、会長の持論だった。実際には、殺精子ゼリーを（女に気づかれないよう、こっそりと）使っているが。

「なるほど。では、僕は妻の貞節に期待しましょう」

睦菜の顔で表情が揺れた。これまでに、僕以外の抜き身を睦菜は身体に受け插れたことはない。貞操帯をはずされて他人の抜き身に犯されれば、初めての不貞になる。その一方で、僕は睦菜を会長の自由にさせている。つまり、これからどんなに拷問されようと番号を白状してはいけないのだと、睦菜は悟ったはずだ。そして、この設定が睦菜を拷問させるためだということも。

会長が、あらためて睦菜に自白を強要する。

「数字を白状するまで、あの鎖で逆さ吊りにして鞭で打ち据えてやるぞ」

睦菜の頭をかかえて天井のウインチを見せつけた。

「旦那様を裏切るわけには、いきません」

睦菜が、きっぱりと答えた。陶酔の響きがにじんでいる。睦菜は、苦痛そのものを望む

ようなマゾではない。しかし、主人である僕が悦ぶのであれば苦痛を甘受して、その状況に愉悦を見出すマゾには育っている。

「その言葉がほんとうか、確かめてやろう」

僕を除く四人が手伝って、睦菜を逆さ吊りにした。両足首を別々の鎖で縛って吊り上げ、それぞれのウインチの位置を調節して、V字形に開脚させた。倉庫用のパネルで作ったプレハブだから、吊り責めにもじゅうぶんな高さがある。

両手は真下に伸ばして縄で縛り、コンクリートブロックを結んだ。これで、睦菜は裸身を手でかばうこともできなくなった。

「これは、真つ更の新品らしいな」

ほかの笞や鞭も、そんなに使い込んでいるわけではない。三メートルもの家畜用鞭は僕には使いこなせないと会長に伝えてあるので、新品と断言できるので。そういうふうに、睦菜の調教について会長にだけは打ち明けてある。

「これがどれほどの威力か、肌身に教えてやろう」

会長が鞭をほどこいて、しゅんつと空中でうねらせた。

パッシン！

先端が宙で跳ねて、小気味よく鳴った。びくんと、睦菜の裸身が震える。

会長が睦菜の正面に立った。カメラマンのS氏は、睦菜と会長を画面の左右に写し込める位置取り。会長が慎重に目測して距離を開ける。右手を斜め後ろに引いて、テニスの素振りほども勢いをつけずにスイングした。

しゅんんん……パッチイン！

鞭の先端が乳房に当たって、乳房をひしゃげさせながら真横に奔った。

「ぎやあああつ……！」

睦菜の悲鳴が土蔵の広い空間をどよもした。これまでに聞いたことのない絶叫だった。

右の乳房から乳首にかけて、太い鮮やかな線条が刻まれていた。左の乳房の内側から乳首にも、同じように線条が走っている。

会長がバックハンドで鞭を返した。

しゅんんん……バッチイン！

「ぎひいっ……！」

痛みの程度（最大に強烈）が分かって、こらえようとして、なお嘔き出たといった感じの悲鳴だった。

「すこしは考える時間を与えてやろう」

会長が睦菜の背面に移動した。乳房を打ったときよりも一歩近づいて、会長が鞭を連打する。

しゅんんっ、バヂイイン。

しゅんんっ、バヂイイン。

しゅんんっ、バヂイイン。

鞭は睦菜の尻に巻き付いて、一周してから先端が肉を叩く。引き戻される鞭が、肌を鋭くこする。乳房に比べれば痛みは薄い。睦菜は悲鳴を洩らさなかったが、目に涙を浮かべて、それがこめかみに滴っている。苦痛をこらえる表情の奥に、恍惚が透けていた。睦菜にとって、これはただの残虐ではない。僕への貞操を貫くと同時に、我が身を犠牲にして

僕を悦ばせているという想いに酔っているのだ。これも、悦虐のひとつの形ではあるだろう。

会長がわずかに後ろへ下がった。

しゅんんっ、ヂャチイン！

鞭の先端が股間の鎖に当たって、金属的な音がした。

「きひいいっ……」

睦菜の裸身が激しく跳ねた。腰に巻いた鎖の張力で、逆さ吊りにされてもナンバー錠の位置は動いていない。つまり、クリトリスにかぶさっている。そこに鞭が当たれば、直に叩かれるほどではないにしても、乳首を鞭打たれる以上の激痛だろう。

「まだ小手調べといったところだ。鍵の数字を言うまで、赦してやらんぞ」

鞭の柄で内腿をなぞり、脇腹をくすぐる。次はこれも鞭打つという脅しだ。

「今日は、そんなに非道いことはなさらないと、おっしゃっていました。鞭くらい、いくらでも耐えてみせます」

それを言っは……僕はヒヤリとした。相手が僕だったら、その健気な心根を愛でて、むしろ手加減してやるかもしれないが。

「K君。すまないが、塩を持ってきてくれませんか。何に使うか、分かっていますね？」
足掛け三日の『研究会』は、まだ始まったばかり。異を唱えるのもためらわれる。そろそろ睦菜に、真性鬼畜サディストの恐ろしさを教えてやってもいいだろう。

僕がプレハブ小屋から出ないうちに、鞭打ちが再開された。

しゅんんん……バッチイン！

「きゃああっ……!!」

あまり急いでは、僕の面子にかかわる。悠然と小屋を出て台所へ行った。

山盛りになるまで継ぎ足した塩壺を持って小屋に戻ったときには、睦菜の全身に鞭痕が刻まれていた。乳房と尻はとくにきつく打ち据えられたようで、血がにじんでいる。しかし傷は表層にとどまって、深くは裂けていない。その程度で済むようには、会長も手加減している。

「ああ、ご苦労様でした。傷はすぐに消毒してやらないと、破傷風のおそれがありますからね」

アルコールで滅菌して油を塗ってある鞭に、破傷風菌が付着しているはずもない。

会長は塩を掌に掬って、尻に擦り込んだ。

「くうう……痛い！ 熱い！ ああああ……ひいいい」

睦菜が、はつきりと泣き始めた。瞬間的な鞭の激痛よりも、傷口に塩を擦り込まれる持続する痛みのほうが耐え難い。

出血と塩とが混じり合って、睦菜の尻がピンク色に染まった。

会長が両手に塩を盛って、睦菜の正面にしゃがみ込んだ。

「つぎは、おっぱいを消毒してやろう。もっと痛いぞ」

「あ、ああああ……旦那様、助けてください！」

これは、睦菜を甚振り虐めるための集まりなのだ。その首謀者である僕に助けを求める虚しさを、睦菜は分かっている。それでも、僕にすぎるしかない。

「僕が鍵の番号を教えれば、この場は収まるわけですが……」

僕は迷っているふうを装いながら、会長に水を向けた。

「しかし、貞操帯をはずせば、睦菜は犯されますね。そうすると、今度は僕が睦菜の不貞行為に対して、今よりも残酷な罰を与えなければなりません」

会長が肩をすくめて、鞭の柄をさり気なく部屋の隅へ向けた。そこには三角木馬が置いてある。なるほど——と、僕はかすかにうなづくことで同意した。

「新妻の貞操を守ってやりたいというわけだね。では、君の気持を尊重して、こうしよう。貞操帯をはずしても、すぐには犯さない。あの三角木馬に夕方まで——三時間といったところか。それまで座っていられたら、無罪放免にしてやる。それで、どうですか？」

三角木馬を今度は指で差して、僕に尋ねる。

「いえ。決めるのは睦菜本人ですから」

会長は睦菜の身体を回して、三角木馬をたっぷり見せつけてから、同じことを問い掛けた。

三角木馬の残酷さを睦菜が知っているはずもない。しかし、高さ六十センチの脚に据えられている正三角形の断面をした木材に座るには、それを跨がなければならないのは自明だ。足は床に届かない。尖った頂点を淫裂に食い込ませて自分の全体重を掛ければ、どうなるかくらいは想像がつくだろう。

「お願いします。わたしを、あれに座らせてください」

睦菜には、僕の目の前で不貞をはたらくという選択肢もあった。そのときは罰として、事後に三角木馬を跨ぐことになる——とは、睦菜の知るところではない。

睦菜は逆さ吊りから降ろされて、傷と塩は盥の水で清められてから、会長の手であらた

めて緊縛された。捕縄術の研究家だけあって、僕の稚拙な縛り方とは比べ物にならない。S氏も、ほとんど接写せんばかりにレンズを近づけて、会長の手練をフィルムに写し撮っている。

腕をねじ上げ、両手を合掌させて縛る。肩甲骨が盛り上がって、その間に手がすっぽり収まる。胸縄を掛けて腋の下で絞る縄と首縄とで乳房を縊り出すのは僕もしているが、僕と会長とは、ブラジャーでいえばワンカップくらいは大きさが違った。左右も完璧な対称形になっている。二の腕をボンレスハムのように締め付けるのだが、意外と苦痛は小さいようだ。

「くうう……ああ、あああああ」

睦菜は甘く呻いて、陶酔の表情さえ浮かべている。縄に酔っている。僕に縛られても（もっと抑制されてはいるが）似たような反応を示すが、そこには僕への信頼がある。見ず知らずの男に傷だらけの裸身を縛られて、より深く酔ってしまうとは——まだまだ、僕の修業が足りないということだ。

いよいよ、貞操帯がはずされた。白い肌に刻まれた鎖の刻印が、貞操帯があつたときよりも残虐を暗示している。

上半身を厳しく縛された睦菜は鎖で吊り上げられて、三角木馬の上に降ろされた。

チャラチャラという鎖の音とともに睦菜の身体が沈んでゆき、三角木馬の稜線が淫裂を割り開く。

「い、痛い……」

体重のほとんどを鎖に吊られているうちから、睦菜は苦痛を訴える。

会長は電動ウィンチを小刻みに操作して、じわじわと睦菜の股間へ体重を掛けていく。

「くうう……痛い。裂ける、裂けちゃいます！」

僕は本物の三角木馬を見たことがある。『古武術研究会』秘蔵の逸品で、少なくとも昭和初期までは、研究会で実際に使用されていたという。三角形の稜線は鋭く尖っていて、木馬にはどす黒い血の跡が染み込んでいた。腿をきつく閉じ合わせるように力を入れると、太腿と斜面との摩擦で体重が分散されるのだが、長時間は続けられない。まして、江戸時代に行なわれていた本式の拷問では、しぶとい女囚には足に錘を吊るすとか、大木槌で木馬を叩いたりしたともいうから、無傷で木馬から降ろされた女囚はいなかったのではないだろうか。

しかし、そんな物を睦菜に繰り返し使っているのは、女性器が破壊されてしまう。この木馬は先端を五ミリ幅の平面にして、その上に直径三ミリのピアノ線が張ってある。だから、木馬の上でおとなしくしていれば、肌が切れたりはいらない……はずだ。

すぐに睦菜はおとなしくなった。叫んでも無駄だし、まして身悶えしようものなら、その動きが股間に激痛を重ねてしまう。

「今は二時四十分か」

会長が自分の鞆から目覚まし時計を取り出した。

「では、切りよく六時までにしよう。それで、おまえの操立ては成就する」

ヒヤリとするものを、また感じた。どうせ、時間までに自白に追い込むのは分かりきっているが。万一とはいわず千三つくらいか。睦菜が耐えきったとしても、それで木馬から降ろすとは言わなかった。もしかしたら、翌朝まで放置か。しかし、それでは……面白く

ない。賛助会員になって三年。会合には十回も参加していない。ひとつでも多くの拷問術を学びたいと思っている。ああ、睦菜のことはあまり心配していない。今回だけではなく今後も、永久に傷が残るような責めはしないというのが、最初からの約束だ。

「おお。全身に脂汗がにじんでいますね」

会員のT氏が指摘した。高橋か津山なのか東郷なのか、会長以外は本名を知らない。僕と同年配だが、僕が最初に会合に参加したときから古株然と振る舞っていた男だ。

「痛みにひたすら耐えるという、こういった静的な悲惨が絵になりますな」とは、最年長のM氏。

「では、三十分ばかり女囚を休ませておきましょう。本格的な拷問は、それからです」

会長の言葉に、睦菜の頬が引き攣った。当人は苦痛の極致に喘いでいるのに、それが休憩だというのだから無理もない。

「では、ガソリンではなく潤滑油でも入れましょう。たいしたものは、ありませんが」

僕は隅のテーブルへ行って、グラスに一オンスくらいのウイスキーを注ぎ、炭酸水とロックアイスとで薄いハイボールを作った。紙皿に一片のチーズとクラッカー二枚を取り分ける。

「一年ちかく調教してこられたのでしょうか。そのわりには、あまり被虐の味を覚えていないようにお見受けしますが？」

カメラマンを務めているS氏が、僕の横に立って話しかけてきた。

「いや、一年や二年でお払い箱にする契約奴隷ではないですからね。五年後の楽しみ、十年後の楽しみと、いろいろ残してあるのですよ」

「おや。これまた、お熱いことで」

それからしばらくは、僕自身が酒の肴にされた。初夜の緊縛とか、新婚旅行先での露出調教とか——そういった何もかもを打ち明けてしまうとは、僕も相当に露悪趣味だ。いや、父母との折り合いが悪く、学生時代の友人も少なく、役掌を秘匿せざるを得ないから銀行の同期とも疎遠な僕にとっては、ここに集まっている人たちこそ、刎頸の友というべきかもしれない。

そういう意味でも、睦菜は僕にとって比翼連理、掛け替えのない存在だと、あらためて思う。その最愛の妻を肉体的に虐待し、大勢の男どもに犯させようとするのだから……つまりは、これがS M的性愛でありS M的愛情だと、断定してしまおう。

「さて、三十分経ちましたな」

会長が立ち上がった。

「まずは、錘といきましょう」

S氏もカメラを置いて。ひとりがコンクリートブロックを宙に支え、もうひとりが短い縄で睦菜の足首からコンクリートブロックを吊るす。左右に一個ずつ。

「せえの」

合図でコンクリートブロックから手を放す。

「か、は、あ、あ、あ……！！」

睦菜が、のけぞって咆えた。その動きでいつそうピアノ線が淫裂に食い込んで、さらなる激痛が睦菜を襲う。

「うう、うううう……」

嗚咽が、いつまでも焉まない。コンクリートブロック一個の重さは約十キログラム。睦菜の体重と合わせると七十キログラムくらい。それだけの重さを、股間に食い込む直径三ミリのピアノ線で支えている。男の僕には、その激痛を想像もできない。

「犯してくださいと願えば、すぐに降ろしてやるぞ。裂けてしまっただけでは、魔羅を突っ込まれるのも痛いばかりで、快感などなくなるぞ」

会長の言葉にも、睦菜は首を横に振るばかり。

「では、致し方ないな。火盗改の流儀でいきましよう。いや、K君。悦虐に染まっただけというのに、ここまで耐えるとは。貴君への忠誠心でしような」

江戸時代には囚人に対する拷問の手順が厳しく定められていたが、凶悪犯を取り締まる火付盗賊改だけは、その制約の埒外にあった。つまり——人権など無かったに等しい江戸時代でさえも禁じられていたような過酷な拷問を、まだ制服を着て学校に通っている年代の少女に加えようというのだ。いや。江戸時代なら、睦菜はれっきとした成人として扱われている。そう考えて、憐憫を押し殺す。

会長が戸棚を物色して、バラ鞭と教鞭と竹刀を選んだ。みずからは竹刀、ベテランのM氏とT氏にはバラ鞭と教鞭とを持たせた。

「K君には、あれをお願いしましょう」

あれというのは、十字架を組み替えるときなどに使う木槌だった。どう使うのかは分かっている。両手で持つ大木槌ほどではないが、トンカチよりはよほど頭が重たい。

僕が三角木馬の後ろ端に、会長が睦菜の斜め後ろに、M氏とT氏は左右に立った。

「K君の木槌に合わせて、おふたりは太腿を叩いてやってください」

会長自身は竹刀を上段に構えた。

「では、K君……」

三角木材に比べれば、木槌の重さなど知れている。そう自分に言い聞かせて、思い切り叩きつけた。

ゴンッ……

パシン、バチン、バジャッ……竹刀が尻肉を、鞭が左右の太腿を叩いた。

「がはっ……！！」

睦菜はのけぞって口を大きく開けたまま、数秒、彫像と化した。鞭痕や縄目が、さながら大理石の模様に見えた——くらいに思わなければ、凄惨を直視できない。いや、無理だ。「会長。これくらいで赦してやってはくれませんか。不貞の罪は問わないことにします」後半は、睦菜に向けた言葉だった。しかし。

「嫌です！」

睦菜が叫んだ。

「旦那様の前で男の人たちに犯されるなんて……絶対に嫌です」

僕は、ちよつと考えて。これ以上の責めはマイナスだと判断した。今夜も明後日も睦菜を甚振るのだ。満身創痍では肉体的な快楽を引き出してやれない。

「お聞きの通りです。僕は、ここで退散しましょう。埒が明いたら読んでください」

睦菜は、旦那様の前で他の男たちに犯されるのを拒んだのだ。その希望だけは叶えてやろう。

僕は木槌を部屋の間へ戻して、引き戸へ向かった。

「旦那様……睦菜をひとりにしないでください！」

僕の見ている前では犯されたくない。しかし、この場に居てほしい。矛盾する願いをどちらにも叶えてやるのは不可能だ。

「皆さんにたっぷり可愛がってもらえ。ただし、決して逝くんじやないぞ。アクメを感じたら、積極的に不貞をはたらいたと見做すからな」

無理難題を置き土産にして、僕は母屋へ引き揚げた。五人が本気でアクメへ追い込もうとするなら、睦菜に勝ち目はなない。単純な恋愛技術では、僕も含めて全員が、世間というプレイボーイやスケコマシに一步どころか数歩を譲る。しかし、拷問術には色責めもあるのだ。拷問蔵の戸棚には、バイブやローターは言うに及ばず業務用の電気マッサージ器から筆まで、各種取り揃えてある。

今回に限っては不貞をはたらいても罰さないと僕が言った言葉を、睦菜が覚えているとしても、きっとアクメに抵抗するだろう。睦菜はそういう女だ。最後のひと言はそれを見越しての、心理的な責めの効果を狙ったものだ。

――八ミリの映写は面倒なので、花電車修業の際に撮られたポラロイド写真を眺めながら、時を潰すことにした。ポラロイドは、普通の写真よりも劣化が早いという。しかも、ポジ一枚きりでネガは無い。カラーフィルムに複写する手段はないだろうか、考えてみた。

装置が大掛かりになるから、白黒と違ってカラーフィルムの現像は街の写真屋では扱えないと単純に思い込んでいたが。夜の繁華街でこっそり売られている秘写真にも、数は少ないがカラーもあった。無任所課長の本領を発揮すれば、その手の現像屋を見つけるのは

難しくない。しかし、こっそり複製されて、睦菜の破廉恥な姿や局部のアップが不特定多数の男どもに晒されるのは、さすがに可哀想だ。と思う反面、そこまで穢してやりたいという誘惑も否定できない。

男の子は好きな女の子に悪戯をする——というのは、身に覚えがあるが。不惑になっても、まだ僕の裡には少年どころかガキの魂が残っているのか。いや、神聖冒瀆とは、こういう感情なのか。

と、そこまで考えて。睦菜は僕の性的欲望に供された生贄であり、僕が自由にできる生きた玩具であるが、しかし、その玩具を喪えば、僕の人生は白黒写真よりも無彩色の風景になるだろうと——突如として気づいた。

だからといって、睦菜への扱いを変えるつもりなど毛頭無い。僕の嗜虐に身を捧げることで、睦菜の悦びなのだから——と思うのは、サディストの身勝手だろうか。

勝手口のブザーが鳴った。開けるとM氏が、きちんと服を身に着けて立っていた。

「ひと区切りがきました」

僕は、六尺禪一本で寛いで（やきもきして）いた姿のままで拷問蔵へ戻った。

睦菜は駿河間に掛けられていた。江戸時代でさえも、公式には禁じられていたという過酷な拷問だ。手足を背中であとめて吊り上げる。身体は逆海老に曲がり、自然と脚は開く。しかし、羞恥に悶える贅沢など許されない。肩も股関節も、抜けてしまうのではないかと思うほどに痛み軋むのだ。さらには重石を背中に載せたり、笞で打ち据えたりもするといふが、ただ吊っているだけでもじゅうぶんに過酷な拷問だ。

僕の姿に気づいて睦菜が、がっくり垂れていた頭をもたげた。

「ああ……」

安堵の息を漏らして……かすかに笑みを浮かべた。唇の端から血が垂れている。なにがあつたのだろうか？

「手強い女囚ですね。シャツポを脱ぎましたよ」

顔の高さにある睦菜の股間を、会長が平手でびしゃびしゃと叩いた。

「最初は普通に犯していましたが、まったくの木偶人形。ならばと、二人掛りも試しましたが同じことでした」

会長が服を脱いで、黒禪一本の姿に戻った。ちよつと外へ出るだけで衣服を正したあたり、ストイックな人物ではある。

「そこで、梯子に縛り付けて本格的な色責めに掛けてやったのです。筆一本で大洪水でした。ところが、そこから先が難儀しました」

会長は睦菜の膝に手を当てて、ぐいと押した。宙ぶりにされた睦菜の裸身が、ゆっくりと回り始めた。

「くう……」

おや？　といったふうには、会長が眉を動かした。

「貴君がいると、呻き声まで違つてきますな。いや、羨ましい。それはそれとして。三点を電気卵責め、女壺は電気張形、菊門は筆。総攻撃を掛けたのですが……歯を食い縛って、耐え抜きましたね。口の中も噛み破つたようです」

睦菜を駿河間に吊つたのは、僕を呼びに来る直前だったという。

僕は黙って睦菜に歩み寄つた。上下逆さになっている顔に唇を近づけ、飛び切りの褒美

をくれてやった。血の味が、なぜか甘美だった。

「まだ夕食には早いですな。もう一時間ほどは、静的な悲惨美を鑑賞しましょう」

会長の提案で、僕たちは睦菜を囲んで潤滑油の補充を始めたのだが。ただ吊るすだけでは悲惨美に届かないという理由で——コンクリートブロックをふたつ、睦菜の背中に並べて乗せた。

「きひいいい……」

会長に指摘されてみれば、たしかに。悲鳴の中に、僕に対する甘えが混じっているようにも聞こえる。

六人で睦菜を鑑賞しながら、会長による即席の拷問講座が開かれた。

座禅転がしは、役人は女囚の肌に触れてはならないという法度の抜け道だった。座禅の形に女囚を縛って前に倒しておけば、役人は魔羅を突き出すだけで（女囚の肌に手を触れることなく）犯せる。それも、元々は（吟味法度の制約で）菊門を犯すのが本道であった。

海老責めは長時間放置すれば、鬱血で囚人を死に至らしめるほど過酷な拷問であるが、あお向けにひっくり返せば、これほど犯しやすい形もない。

十露盤責めは脛の骨を砕く危険があるから、コンクリートブロックひとつを載せるのにも慎重になるべきである。

遊郭で行なわれていた折檻は、商品価値を損なわぬように気をつけていた。食事を与えないとか、丸裸で戸外に曝して夏なら蚊に食わせる、冬なら凍えさせる。顔を水に沈める、急所を針で刺す、あるいは灸を据えるなどなど。もつとも、足抜けをして捕らえられた遊女は『ぶりぶり』と称する、吊るして敲く拷問に掛けられていたという。

「いや、折檻よりもきついという意味で拷問と言いましたが、厳密には正しくありません」
拷問とは、被疑者に自白を強いる行為である。睦菜にナンバー錠の数字を白状させようとしたのが、それだ。

研究会のメンバーであれば何度か拝聴した話も混じっている。しかし、何気なく使っていた拷問の定義には、考えさせられるものがあつた。

「手足の先が紫色に変色していますな」

会長に指摘されるまで気づかなかつた。猛省する。

「では、長期持久体制を整えてから、食事にしますか」

背中のコンクリートブロックは降ろして、手足だけでなく腰も吊つて体重を分散させる。腰を吊つた時点でぐんと楽になるから駿河問ではなくなるが、安心して放置できる。

僕たちは睦菜の無言に見送られて、拷問蔵を出た。寿司屋の出前が届く二十分前だった。

やはりガソリンではなく潤滑油にとどめて、拷問講座は西洋の魔女裁判と異端審問に及んだ。

僕は知らなかつたが、両者はまったく別物だそうだ。魔女裁判は墮天使である悪魔に魅入られた者を（炎で浄化して）救うのが目的だが、異端審問は神の教えをねじ曲げる者を滅ぼすために行なう。被疑者を待ち受けている運命は同じだが、建前は正反対なのだ。

どちらも被疑者の自白がもつとも重視されるが、魔女裁判では『物証』だけで有罪にできる。悪魔と契約した証の刻印を、全身に針を突き刺して調べるのが、そのひとつだ。水は邪悪な存在を受け入れないから、水に放り込んで浮かべば、その者は魔女だとされるといふこともある。身の潔白を明かすには、溺れ死ななければならぬ。

西洋人の残虐さは、日本人の感性では受け容れ難いところがある。

——拷問蔵へ戻ったのは、寿司が届いてから一時間後だった。

腰の縄で体重の過半を支えているから、手足の鬱血は一時間半前よりも軽くなっていた。とはいえ、苦しい姿勢であることも事実だ。人の気配には気づいたが、もう顔を上げてこちらを見る気力も消尽している。

「背中反らしを続けさせましたから、今度は前屈にさせましょう」

睦菜は床に下ろされ縄をほどかれ、会長の手で高手小手に縛り直された。結跏趺坐を組まされ、重なった脛を縄で幾重にも巻かれる。いちばん体重の重いN氏に尻を背中にしたかけられて、顎が脛にくっつくまで深々とふたつに折られ——首縄でその形に固定された。そのまま放置するか、身体を立てて柱に縛り付ければ正統の海老責めだ。うつ伏せ放置は、背中に重石を追加するか、笞で打ち敲くか。身体を立てるのは女囚に効果的な羞恥責めになる。

しかし睦菜は裏返しにされた。二穴を天井に向けて晒すのだから、いつそう効果的な羞恥責めにもなるが、主目的は会長が講義の前半で述べたとおり、陵辱にある。

「やはり、トリは貴君にお願いするのが筋というものでしょうな」

衆人環視の中で女を犯すのは、『土鈴愛好会』では義務でさえあるし、『古武術研究会』でも三度目だ。しかし女が他人の所有物ではなく他ならぬ睦菜となると、照れ臭い思いがないでもない。とはいえ、それで萎えるほど僕は純情でも軟弱でもない。むしろ、いっになく張り切っているくらいだ。

僕は縄をはずして、睦菜の股間を見下ろす位置に立った。すでに濡れている。会長に縛

られてゐるあいだに縄酔いを起こしたのだろうか。

「おやおや。貴君に見詰められただけで濡らすとは……相思相愛も極まりですな」

会長の声には揶揄の響きがあった。この人物は、マゾ女は責め手の技量を信賴すべきであつて、人格で選り好みをすべきではないという信条の持ち主だ。換言すれば、愛情に裏打ちされたSMなど甘つちよろいと考へてゐる。

「そういう意味では、こいつは女囚失格かもしれませんね」

睦菜を『古武術研究会』の女囚に供する機会が（まったく無くなりはないとしても）減るかもしれないと考えると、安心と残念とが同時に去來した。掌中の珠を他人に委ねるのには、やはり鬱々たるものがある。しかし、僕だけでは限度を見極めにくい極限の責めを諦めるのは口惜しい。

それは、一瞬の想念。これなら前戯もゼリーも必要もなろうと判断して睦菜においかぶさり、一気に貫いた。

「あああああ……！」

いきなり睦菜が絶叫した。

二時間以上も前に、さんざん色責めに掛けられて、アクメに達すまいと抵抗して。睦菜の奥では、そのマグマがずっと滾っていたのだろう。それが、僕に噴火口をこじ開けられて、一気に放出されたのだと思う。

駿河問の苦痛を、きつともらえるだろう褒美のことを考へて、耐え続けてきた結果なのかもしれない。

一深九浅など無用。深く穿ち込むたびに、睦菜はアクメに向かつて翔け昇っていく。

「あゝあゝ……いい、いい……」

それとも。常に公然猥褻すれすれの服装を強いられるうちに露出願望が醸成されて、露羞恥あるいは露醜にまでこじらせてしまったのだろうか。

「があああつ……！」

睦菜が咆えた。この一年ちかく聞いてきた、息を吸い込むような可憐な悲鳴ではない。

菊枝が言っていたライオンの咆哮とも違う。ライオンの……断末魔はこのようなかと思わせる、悲痛な叫びだった。

しかし、睦菜がこれまでになく深い高みに達したのは、間違えようがない。足の指が五本とも、骨折したように反り返っている。縄を巻かれた脹脛が、こむら返りを起こしたみたいに痙攣している。

僕もまた——睦菜を女悦の極限まで追い上げたという、男としての深い満足を噛み締めながら、膣奥深くに決して孕ませることのない精を放出したのだった。

僕がトリを務めた後は、重石や笞の追加はせずに海老責めの基本を三十分。

それから、磔柱を初めて使った。キの字架に大の字磔。手首から二の腕まで横木に縛り付けて、体重の過半を支えるようにした。柱から三角形の楔を突き出させて、股間で残る体重を受けさせる。楔はじゅうぶん（半径二ミリくらい）に丸めてある。足首を横木に縛り付けて、足の裏は宙に浮いている。

それまでの逆さ吊り、三角木馬、駿河問、海老責めに比べれば、睦菜の肉体に掛かる負担は、ぐんと少ない。精神的にも受容範囲だったと思う。その証拠に、翌朝になって拷問

蔵を開けてみると、睦菜は熟睡していた。心身ともに消耗し尽くして、失神していたのかもしれないが。

ともあれ。朝から駆けつけてもらった会長とT氏、S氏に手伝ってもらって睦菜を礎柱から降ろして、あらためて傷の手当てをやって。足元がふらついていたので、あお向けにして手足をつかんで持ち上げ、寝室へ運んだ。シーツの上にビニールシートを広げて、睦菜を寝かせた。

会長以下の三人は隣県にある名勝地へ観光に出かけて、僕は暇を持て余す。

昼過ぎには、睦菜もしゃきつとして下へ降りてきて、シャワーで入念に身体を清めてから、二十四時間ぶりにまともな（といっても、インスタントラーメンに生卵を落としたただけだが）食事をした。

この日は完全休養日に充てていたから、服装は自由にさせた。それでも僕の目を意識してか、素肌に僕のワイシャツを羽織ってボタンは留めないという、裸エプロンよりもエロチックなくらいのアッションで半日を過ごした。

夜も拘束は一切せずに、全裸の睦菜を抱いて一緒に寝てやった。僕の腕の中で、睦菜は幸せそうだった——と見たのは、自分勝手な思い込みに過ぎないだろうか。

五月五日。すっかり元気になったが、肌にはまだ鞭傷が残っている睦菜への本格的な拷問が再開された。会長の定義によれば、自白を強要するのではないから拷問ではない。落ち度を責めるのではないから折檻でもない。サディストによる恣意的な責めであり加虐である。

責め手は一昨日と同じ。M氏とN氏は住まいが近県なので、飛び石の日帰りだ。

「この中で『ラブ・キャンプ7』という洋画セブンをご覧になった方は、おられますかな」

両手を頭の後ろで組んで開脚の姿勢で立つ睦菜を前に、会長が僕たちに尋ねる。いうまでもなく、睦菜は全裸だ。

「昨年の洋画ですね」

いちばん若いS氏が答える。

「左様。ナチスに囚われている女性技術者を救出するために連合国側の女スパイが収容所に潜入する話ですが——筋立ては、どうでもよろしい」

女性ばかりの収容所。その実は強制慰安所で、逆らう女は厳しく処罰される。連帯責任による集団処罰もあれば、女囚同士のレズもある。従順であっても、機関銃で威嚇されて全裸で壁際に並ばされ、ホースで高圧水を吹き付けて洗浄するという、史実に基づいたシーンもある。SMの教科書のような成人映画だという。

※ナチスによる女囚虐待というジャンルを樹立した『ラブ・キャンプ7』は、1969年10月に日本公開されました。

「三角木馬などはベニヤ製のチャチな代物ですが、ドイツ兵の手作りと考えれば、むしろ現実味があります。本邦では見掛けない責めも幾つかありましたから、ずいぶん勉強にはなりました」

睦菜を使って、その勉強のおさらいをしよう。

拷問蔵の床は打ち放しのコンクリートに、厚いビニールを敷いてある。緊縛のまま倒れても（体勢によるが）怪我をしないし、粗相をしても簡単に洗い流せる。だから、バケツ

とモップも備え付けてある。

そのバケツに三分の一ほど水を入れて、睦菜に両手で持たせた。腕をまっすぐに伸ばして、目の高さに掲げさせる。

「重たいかね」

「……平気です」

睦菜が、ためらいがちに答えた。なにか異があるのではないかと疑っている。

「五分やそこらは、そうだろう。だが、三十分、一時間となると、大の男でも難しい」

見張っていて、腕が下がれば鞭打つ。収容者全員に競わせて、最初に脱落した女囚には厳罰を与えるなどの動機づけが必要だ。

「それでは女囚に絶望を与えられませんな」

仲間で励まし合う。あるいは、監視されていれば、監視者の慈悲を期待してしまう。たしかに……僕が監視者なら、睦菜を甘やかしかねない。

「そこで、ひと工夫を考えたのですよ」

ハンガーで壁に掛けてある背広から会長が取り出したのは、なんの変哲もないタコ糸だった。両手を前に突き出し足を踏ん張っている睦菜の前に、会長がしゃがみ込んだ。

「乳首でもいいのですが、やはり淫核のほうが面白いですか」

淫核を引き伸ばし包皮を剥き下げて、実核の先端近く、ペニスでいえばカリクビのようにくびれている部分をタコ糸で括った。

腕の間に糸をくぐらせて、斜め上へ引き上げる。

「くう……」

睦菜が控え目に呻いて——爪先立ちになった。そんなことをしても、いつそう引き上げられるだけで痛みを和らげることはできない。分かっている、身体が動いてしまうのだろう。

「K君。天井のやつをバケツの真上へ持って来てください」

そういうことか。会長の残酷な意図を理解して、しかし、睦菜の泣き叫ぶ姿を想像しながら、電動ウィンチを動かした。

一昨日は会長というか『古武術研究会』の過虐に辟易し（かけ）ていたというのに。やはり僕は女性への愛情よりは嗜虐のほうが強いのや、そうではない。すくなくとも睦菜については、愛情イコール嗜虐だ。

鎖を巻き下げて、吊りフックをバケツすれすれまで近づける。

会長がタコ糸をフックに引っ掛けて折り返し、バケツの取っ手に結び付けた。睦菜が腕を下げれば、クリトリスが上に引っ張られて、鞭打ちどころではない激痛に——腕を引き上げるまで襲われ続けることになる。

「デグス糸も考えたのですがね。細いから実核きねが千切れる恐れがあると判断しました」

やってみなければ分かりませんがね。ぼそとつぶやいて、睦菜の顔を蒼褪めさせる。

最後に会長がリモコンを操作して、フックの高さを調節した。両脚を揃えて腕を水平まで上げた位置で、タコ糸の弛みがなくなり、クリトリスがわずかに引っ張られる。腕を上げるか爪先立ちになれば、タコ糸は緩む。

肘を曲げてバケツを胸元へ引き付ければ楽になるが、見張りがいればそんなズルは許されない。腕を棒で固定すれば完全放置も可能だと、会長は気づいているはずだが。あえて

そうしないのは、なんらかの意図があるのだろうか。

一昨日と同じように、睦菜を囲んでパイプ椅子を並べて。

「これは悲惨美ではなく残虐美でありますな」

僕には両者の違いが分からないが、とにかくそれを観賞した。

十分もすると、睦菜はもぞもぞと身体を動かし始めた。腕を十センチほど上げてみたり、逆にすこし下げて爪先立ちでしのいだり。片方ずつ腕の力を抜くのは、持久を続けるのにかなり効果がありそうだった。

「次からは、手首に錘を吊るしますかな。しかし、それは美しくない」

手を放せば腕は楽になるが、クリトリスが千切れるかもしれないという女囚の恐怖と葛藤が美の真髄だと、会長は言う。僕としては、そこまでスティック(?) になれない。

やがて、睦菜の全身が汗に濡れてきた。

「く……ぐうう……」

華奢な腕に筋肉がささやかに盛り上がって、ふるふると震えている。

しかし、泣き言は言わない。弱音を吐けば鞭で激励されると、それくらいはわきまえている。

三十分に達そうとする頃から、睦菜の両腕が目に見えて下がり始めた。爪先立ちでは追いつかず、クリトリスが引き伸ばされていく。

「くううう……もう駄目。旦那様、お赦してください」

会長が、ゆっくりと顔を横に振った。

クリトリスは血の気が引いて、真っ白に変色している。

「この場を仕切っているのは会長さんだ。会長さんをお願いしなさい」

睦菜はイヤイヤをするように首を振った。僕以外の者には慈悲を乞いたくない。そんなふうに見えた。

さらに五分。ついに、睦菜が力尽きた。

「もう……」

睦菜の手からバケツが滑り落ちた。

「ぎゃはあああつ……！」

睦菜が絶叫する瞬間に会長が椅子を蹴って、低い姿勢で突進していた。床に落ちる前にバケツを受け止めた。しかし、その必要はなかった。クリトリスが変形して、タコ糸がすっぽ抜けたのだ。

両手で股間を押さえてうずくまる睦菜。

僕も睦菜に駆け寄って——肩を抱いてやり、痛みが治まるのを待つくらいしかできなかった。

クリトリスは傷ついていたが、わずかに血が滲んでいるだけだった。とはいえ、我が身に置き換えて考えて見ると。カリクビをタコ糸に縊られて無理矢理に引き抜かれたら——背骨の中で磨りガラスを引っ搔かれるような戦慄に襲われた。

クリトリスには、止血と殺菌に黄色い粉末（ホルム散）をまぶしただけで、勉強会、は続けられる。

「西洋中世の拷問図では何度か見たことがありましたが、映画で取り上げられるほど普及しているとは知りませんでした」

睦菜を立てせて、腕を伸ばしたまま後ろで縛る。手首の縄にウインチのフックを引っ掛けて、じわじわと巻き上げていった。腕が吊り上がり、それにつれて上体が前へ倒れていくのだが――腕と体幹とが直角になり、上体が四十五度ほど傾いたところで、均衡に達した。

関節の構造上、腕はそれ以上ねじ上げられない。上体をさらに倒せば、かえって手首の位置は下がってしまう。

チャリ……わずかにウインチが巻き上げられて、睦菜は爪先立ちになった。

睦菜は苦しうに沈黙している。駿河問よりも厳しく腕をねじ上げられているのだから、一年前いや半年前の睦菜でも、とつくに悲鳴をあげているはずだ。

「西洋では、この吊り方をストラップイドウと呼ぶようですが、さしずめ『後ろ手一本吊り』とでも意識しますか」

この形では股間を蹴りにくいと、会長が尻を軽く叩く。

「映画では、このままで尻や背中を革バンドで打ち据えていましたが……」

会長が乳房をつかんで、乱暴な愛撫くらの強さでこねくった。

「下から打ち上げるのも面白いでしょうな。それとも」

乳房から手を放して、リモコンを握る。

チャリ……

「きいいい……」

爪先が床から浮いて、ついに睦菜が悲鳴をこぼした。暴れば衝撃が肩に伝わって、ますます痛くなるだろうに――ありもしない床を踏みしめるように足を前後に振っている。

「中世西洋の拷問では、高く吊り上げてから縄を放して落下させ、足が床に着く寸前に引き戻したそうです。ショックで、体重の数倍の重みが肩に加わります」

さらに錘を付加する場合もあると、会長が説明する。肩関節は破壊されてしまう。

「もちろん、そんな取り返しのない拷問はしません」

会長が睦菜の後ろにまわって、両手で腰を押した。ブランコのように、裸身が大きく揺れ始めた。

「痛いっ……きいいいっ……!!」

睦菜の顔が苦痛に歪んでいる。

「これくらいなら、女は身体が柔らかいし、この女囚はじゅうぶんに若いし。せいぜい脱臼するくらいですか」

脱臼なら整復できるから、永久に痕が残るような責めはしないという約束は守られている。しかし、口の中が苦い。

「ふむ……このまま滅多打ちにすると、身体が回るし狙いが定めにくいしで、鞭がどこに当たるか分からないという、ルーレットのような愉しみ方もできるので」

会長が僕に向き直った。

「K君は色責めのほうがお好きなようですね。残虐美の追求は、別の機会に譲るとしましょう」

しかし、せっかくだからしばらくは珍しい形を觀賞しようということで、また睦菜を囲んで椅子に座って。拷問談議に花を咲かせる。

揺れが小さくなってくると弾みをつける役目は、僕にまかされた。あまり手加減すると

新参のS氏にまで舐められそうなので——ただ前後に揺るのではなく、円を描くようにぶん回したり、裸身を自転させたりもした。ただし、急激な力は加えずに、じんわりと押すようには心掛けた。

「もつと大きく振つても大丈夫ですよ」

柔道整復師の資格を持っているM氏が太鼓判を捺す。脱臼すれば腕の角度が変わるから、すぐに分かるという。会長の周到な人選に、いちおうは頭を下げておこう。

それから三十分ほどは、会員の近況報告というか自慢話なのか愚痴なのか。

僕と同じように妻を愛奴（でも女囚でも）に調教しているのがM氏。とはいえ『古武術研究会』のような過激な責めは、当人が激しく拒むので無理だという。

T氏は、家庭とSMとを切り離している。愛妻家を装いながら、愛人を囲って調教を試みているのだが——半年もしないうちに逃げられてしまうとぼやいている。

N氏は独身主義者だ。愛人志望の若い女を見つけては別荘に、せいぜい一週間ほど監禁して、たいていは仲間を集めて、拷問と輪姦に耽る。女を解放するときにはOLの一年分の給与以上の金を渡して口封じをしている。それだけの財力がある。写真を脅しに使っているかどうかまでは語らないが、太陽と北風の両面作戦はありそうな話だ。

若いS氏は特定のパートナーがおらず、SM専門雑誌の交際欄にせっせと投稿しているが収穫は無く、歳を食って客がつかない立ちんぼに大枚をはたいてうつぶんを晴らしている現状だ。

会長はというと。結婚半年で調教に失敗して離婚。以後は『古武術研究会』に専念し、全国に網を張ってマゾ女を発掘している。会員が増えて伝手が広がった今でも、新たに捕

らえる女囚は年に五人くらい。そのうちのひとりでも第〇〇号として服役させられれば上首尾だという。

そうしてみると、僕は行幸に恵まれ過ぎているとさえ思う。せめて、睦菜を存分に甚振ってもらわないと申し訳ないような気分になる。

「これだけの設備があれば、たいがいのことが出来ますな。ことに、天井を走る電動滑車が素晴らしい」

近況報告が一段落すると、会長がここに話を転じた。

「女囚を吊って回すと縄に撚りが掛かって、だんだんと吊り上がっていく。まあ、それを利用した責めもあります」

座禅転がし、あるいは狸縛りの形で性器が真下になるようにして吊り上げ、男が仰臥して（ペニスは勃てて）、そこに女囚を降ろす。ペニスが膣なり肛門なりを貫いたまま、女囚の身体を自転させる。ピストン運動ではなく、普通のセックスでは困難な回転刺激を与える。しかも、吊り縄の撚りで女体を持ち上がり、頂点で逆回転させれば下がっていく。そういう変態的なことをされているという想いで昂奮する女もいるが、総じて性感は男女ともピストン運動に負ける。

「小生の主義には反するのですが、コンドームを使えば、話は別です」

コンドームの中に、カリクビに沿ってパチンコ玉を三つか四つ入れておくと、それが膣を横方向に掻き回して、女は処女でもない限り善がり狂うのだとか。しかも、男はコンドームで性感が低下するので、暗算などしなくても長持ちする。

※当時のコンドームは、現在の三倍以上の厚みがありました。

女をアクメに導くのが目的ではない（むしろ目的に反する）から、ここ三年は披露していないと聞いて――すぐにでも睦菜に試してみようと思った。

「今日は、女を苦しめて男だけが愉しむやり方でいきます」

睦菜を後ろ手一本吊りから下ろし、両脚を揃えて逆さ吊りにした。フックに別の縄を足して短いポニーテールに結び付け、顔を仰のかせる。

「口開けはK君にお願いしますかな」

睦菜の真下にクッションを積んで、僕が背中を反らせて仰臥した。ペニスのすぐ上に、睦菜の頭がある。分かってきた。

「愛しい旦那様の逸物だ。心を込めてしゃぶって差しあげろ」

チャリチャリ……睦菜の額が、僕の下腹部に当たった。さらに髪を引っ張られて全身が弓なりになり、唇がペニスに触れた。睦菜は、ためらわずに啞える。

すでに半勃起状態だったのが、たちまち怒張する。

会長が睦菜の横に立って、腰をつかむ。

「では、始めますぞ」

睦菜の身体が回り始める。吊っているチェーンとペニスとは、微妙に軸線がずれている。

睦菜の自転につれて、ペニスは小さな円運動でこねくられる。睦菜の顔もすこし傾いているから、一回転ごとに舌と頬と上顎がこすられる。

チェーンが捻じれないように、フックは自由に回転できる仕掛けになっている。つまり、先に会長が説明したのとは逆に、睦菜はいつまでも同じ高さで同じ方向に回り続ける。もっとも、縄の捻じれがないので回転速度はすぐに落ちる。誰かが横で回し続ける必要はあ

った。

「刺激が足りませんか？」

睦菜の顔が邪魔になつて腰を突き上げられないから、たしかに物足りない。会長の言葉で睦菜もそれに気づいたらしく、積極的に舌を絡めてきた。音を立てて啜ったりもする。口の中で暴れまわるペニスを相手では思うようにいかないらしく、大した刺激にはならなかった。

「では、こういうのはどうですか」

部屋の隅に設けてある洗い場から、会長がバケツに水を汲んできて、睦菜の頭にぶつ掛けた。

「んぶふっ……ぶはあっ……」

不意を衝かれて水を吸い込み、睦菜が激しく噎せた。けれど、口には勃起したペニスを突っ込まれているから、咳き込むことすらままならない。

「げふっ……ぶふっ、むぶうう……」

睦菜の苦悶が直接にペニスを刺激する。憐憫と嗜虐とが拮抗して——あっさりと射精してしまった。

僕が腰を痙攣させるのを見て、会長が睦菜の回転を止めた。

「ぶふっ……んふう、ふうう……」

吐き出そうと思えばできるのに、睦菜はペニスを咥え続けている。こくと喉が動いて、僕が放出した白濁を呑み込んだ。

僕のほうが動いて、睦菜を解放してやった。

チャリチャリ……睦菜が五十センチほど吊り上げられた。

「では、二番手は——どなたですか？」

S氏がいそいそと位置に就く。

「先輩を差し置いて申し訳ないですが、若気の至りということで。その分、たつぷりとくれてやります」

コンドーム無しのイラマチオ。他人の精液を飲むのも、睦菜は初めてだったな——射精直後の虚脱の中で、ぼんやりとそんなことを考えていた。

——僕ほどの想い入れを持たない五人は、僕の三倍くらいは時間を掛けた。水もバケツに一杯では足りず、睦菜は二度も三度も苦しめられた。それでも射精に至らなかったM氏のと きなどは、短くした煙草を鼻の穴に突っ込まれて——これは、大失敗だった。激しく咳き込んだ勢いで煙草を吹き飛ばして、それがM氏の腹に落ちてしまった。

「あちつち……」

M氏が横に転がって逃げた。

会長が足で睦菜の肩を蹴って回転を止め、怒声を浴びせる。

「K君に遠慮して手控えていたが、これは許されざる大罪だ」

睦菜を処罰すると、会長が宣告した。

「水と火と、どちらにしましょうかね」

バケツを親指で差して、それから股間を火の点いていない煙草でつつく。

永久的に痕が残る責めはしない約束だから、煙草は火傷がケロイドにならないよう、数秒間軽く押しつけるだけだろう。しかし。僕はまだ、火を使った責めをしていない。睦菜

の『初めて』は、何からなにまで独占したい。僕は迷わずに答えた。本格的な水責めもしたことはないが、『潜望鏡』をさせながら急速潜航して、そのまま頭を押さえ込んだりしている。

「水でお願いします」

髪の毛がフックから解放されて、睦菜の逆さまの裸身が垂直になった。クッションがあった位置に、水をいっぱいに張ったバケツが置かれた。睦菜も、自分に与えられる罰がどんなものか、嫌でも悟らざるを得ない。無駄に慈悲を乞ったりはしなかった。どころか、水に突っ込まれやすいように頭を立てて、僕を見詰めながらゆっくりと深呼吸を始めた。

それは――僕への信頼と服従の体現ではあったのだが。

「無言の抵抗といった趣ですな。なかなか情の強い女だ」

睦菜の心を直観できない者には、そんなふうに見えるのかもしれない。

会長が不意打ちにウインチを巻き下げた。

ざばっと水を溢れさせて、睦菜の頭がバケツに沈んだ。

「溺れる限界を見きわめるには、どうすればいいのでしょうか」

僕自身の手で睦菜を水責めに掛けるには、ぜひとも知っておかねばならない。

「小さく泡を吐き出しているうちは、まったく心配ありません」

すこしくらい激しくなっても、まだ大丈夫。本能的に残している空気を一気に吐き出したら、すぐに引き上げてやらねばならない。水を吸い込んでしまう。

「とはいえ、駆け引きをする女囚もいますからね。しばらく息を止めてから、盛大に泡を吐いて、限界を装ったりします」

引き上げた直後に、口の中に水が残っているのに空気を吸い込もうとして激しく咳き込むようなら、それは本物だ。

「結局は、すこしずつ様子を見るしかありません。あまりぎりぎりまで追い込むと、肺に水を吸い込んで、何時間も経ってから苦しみ出すこともあります」

女囚を極限まで甚振るといっても、突き詰めれば真似事に過ぎない。ほんとうの限界は、女が自分で思っているよりもずっと先にある（だから、弱音を吐いても取り合わない）とはいえ、その何歩か手前で中断してやるに如くはない。

「そろそろですな」

ずっと睦菜に目を配っていた会長が、講義を中断した。なるほど、さっきまで小さな泡が浮かんでいた水面が静かになっている。と見た途端に。ポコポコッと大量の泡が弾けた。チャリリリリ……ウインチが急速に巻き上げられる。

睦菜は口から水を吐き出し空気を貪ろうとして、激しく咳き込んだ。

「うん、大丈夫ですな。水を吸い込んでいたら、咳くたびに水しぶきが飛び散ります」

その兆候は無く、じきに睦菜も落ち着いてくる。もつとも。当人は死の淵まで追い込まれた恐怖からか、生還できた安堵からか、泣きじやくっている。

「まだ、甘えておるのか。シャンとしろ」

ひぐつと、子供のようにしゃっくりをして、睦菜が泣き止んだ。そして、口をつぐんで次の仕置を待つ。僕に責められているときは、まるで違う。そうしてみると、やはり。もう駄目と訴えるのも慈悲を乞うのも、僕への甘えだったのだろう。

M氏が気を取り直して、元の形に仰臥した。睦菜は、また髪を引っ張られて浅い弓なり

にされて。ぐしょ濡れの髪が、M氏の腰を覆い隠していく。

逆さ吊り回転イラマチオ責め（もうすこし風情のある名前を考えると、会長は言っている）は、昼前まで掛かった。その後は睦菜をキの字架に磔放置して、六人全員で昼食に出た。明日はそれぞれに仕事もあるので、食事が終わって散会。

午後からはどんなふうに責められるかと不安におののいている睦菜の期待（？）を裏切ること、すこしだけ疚しさを覚えたが。その分たつぷり可愛がつてやる（鞭傷はともかく、クリトリスはまだ痛いだろう）。まずは、会長が言っていた、胡坐縛りにして吊り上げる回転女芯（それとも菊門）責めを試してみよう。

社員旅行

拷問蔵での本格的な折檻は睦菜の体力を奪うし、鞭傷も数日は残る。傷が完治する前に傷を重ねると、ついには瘢痕となって消えなくなる。だから、せいぜい月に一度か二度しか拷問蔵は使わなかった。ふだんは、スリッパや布団叩きを使った軽いスパンキング。露出過剰な服装をさせるか、苦痛と快感を与える変態的な下着を着けさせるくらいで（僕は）満足していた。

入浴時の『泡踊り』と『潜望鏡』は欠かさなかったし、週に一度は花電車も演じさせた。セックスのときは必ず縛るか手錠や枷で拘束するという（自分で定めた）ルールは、も

ちろん守っている。

梅雨にはいると、愉しみが増えた。すこし遠出をして、傘を持たずに外を歩かせる。雨に濡れた衣服が肌に貼りついて透けて、下着は着けていないので全裸も同然になる。しかし不可抗力（という建前）だから、警察に通報されることも（滅多に）ない。親切な人だと、傘を貸してくれたら雨宿りしていきなさいと声を掛けてくれる。どちらの善意も断わらせているが。残念なのは、十メートル以上は睦菜から離れて他人の振りをしなければならぬことくらいか。

あるいは。全裸緊縛で裏庭に放置するというものもある。立ち木に縛り付けると雨よけになるので、構図としては素晴らしいが厳しさに欠ける。裏返し（あお向け）の海老責めは、身体が冷えて体力を奪われるので三十分が限度だと見定めている。杭を打って地面に大字磔なら、二時間くらいは大丈夫。

これほど雨天を楽しんだのは、小学生（長靴でじゃぶじゃぶ）のとき以来だった。

梅雨が明ければ、夏本番。露出がもつとも自然に見える季節だ。しかし、街中ならともかく海では、ふだんはノースリーブで肩を露出するのも羞ずかしがる乙女でさえも、身体の線も露わな水着で（男の目を意識しながら）平然としている。だから、睦菜に平凡な水着は似合わない。新婚旅行で買った、日本ではお目にかかれないほどの過激なビキニ水着でも、今の睦菜には（僕が）物足りないくらいだ。

だから、もしもふたりに海水浴に行ったときには、睦菜にもお揃いで六尺褌を締めさせようかと目論んでいる。それとも、海女が締めるバタフライみたいなサイジとかいうやつ

にするか。プールや整備された海水浴場ではひと悶着だが、さびれた海浜ならトップレスでも颯爽程度で済むと思う。

最近では減ってきたが、人前で乳房を露出して赤ん坊に乳をふくませる母親は、まだ見掛けることもある。裸の女が男に直面してとっさに隠すのは、日本では股間だが西洋では乳房だという。それだけ、日本では乳房への羞恥感情が薄い。

それは八月の後半か、もしかすると来年の愉しみとして。当面はビキニ水着にも出番があった。

七月末の社員旅行だ。任意参加だが、会社の補助金が出て格安なので希望者殺到。情実を交えての抽選結果は男性が九十三人（うち、独身者が四十三人）、女子行員も四十三人で同数——というのは話が逆で。女子行員は無抽選で、独身者の当選数をそれに合わせている。家族も参加できて、奥さんが二十三人と子供（六歳以上、十五歳以下）が十八人。

大学卒のエリートと良家の子女ばかりの中では、睦菜のビキニ水着は凄まじい破壊力を発揮するだろう。

家で試しに着けさせてみて、僕は瞠目した。去年に買ったときははぶかぶかで、紐を結び縮めたり布を絞ったりしなければずり落ちそうだったので、体型に合わせて仕立て直しておいたのだが。今では小さめになっている。乳房は水着からこぼれそうだし、尻に布が食い込んで紐みたいになってしまう。アルバムを持ち出して新婚旅行のときの水着姿と比べると、ずいぶんグラマーになっているのが分かる。まだ成長が完全に止まっていないせいもあるだろうが、日々のセックスで女性ホルモンの分泌が活発になった結果の性長——まさしく、僕が手塩に掛けて育てた成果だった。

こうなつてみると。ビキニ水着を睦菜自身の手で、さらに小さめに仕立て直させるのも面白いが、それは社員旅行が終わつてから。

それよりも、着て行く服の準備だ。とつくに腹案は出来ていた。腹巻だ。金太郎の腹掛けみたいなやつではない。寝冷え対策に使う袋状の腹巻。普通に着用すれば、腰から乳房の下までを覆うのだが、大きめのサイズにして上下に引つ張れば、超ミニスカートのワンピースになる。ならなくても、強引にならせる。

上端は両面テープで、乳首のすこし上あたりに貼り付ける。腰にはベルトを通す輪を縫い付けて、幅広のリボンを通す。前で蝶結びにすれば、アクセントにもなる。下端から十五センチくらいのところに編みゴムを前後に緩く通しておけば、これが淫裂に食い込んで、裾は股下七、八センチから上にはたくれあがらない。寝冷え対策の腹巻だから生地は薄くて肌がすこしだけ透ける。あまり過激にならないよう、濃いピンク色を選んだ。リボンは純白。

仕上りを想像しながら、自分を辱めるドレスを仕立てる睦菜の心境がどんなものだったかは、当人に語らせるよりも、あれこれ想像を逞しくしているほうが楽しい。出来上がった腹巻ドレスをまとう睦菜の姿は、ピンクサロンのホステスよりも、よほどエロチックだった。

そんな露出ファッションの睦菜を集合場所へ連れて行くと、雑談がびたりとやんで視線が集中する。子供にはよろしくないなので、単身参加の既婚者が五人ばかり集まっているあたりへ行つた。

「お若い奥様を迎えられたと聞いていましたが、いや、実にお若い」

「これはまた……こういうファッションが、若い女性のあいだでは流行っているのですかな」

「いや、亭主の好きな赤烏帽子でしてね。本人も、満更でもなさそうですが」

質問に答える形で、この場における睦菜の立ち位置を、念押ししておいた。

「ははあ、なるほど」

質問した第二審査課長は不得要領の顔。

「内助の功というやつだね」

組織図としては上司にあたる総務部長は、無任所課長の裏仕事もひと通りは知っているから、意味深な言葉ではある。

総勢百七十七人が四台のバスに、本店支店を混ぜこぜにして分乗。席順は緩い年功序列だが、独身男女はその場のくじ引きでアベックになった。僕は前から四列目。夫婦は、年配者ほど夫が眺めの良い窓側に座る傾向がある。若い夫婦や即席のカップルは、女性が窓側。僕は外の眺めではなくバスの中での視線を考慮して、睦菜を通路側に座らせた。出し惜しみ見せ惜しみはしない。

しかし僕に遠慮して、睦菜に視線が集まることもなかった。

海辺のホテルに着くと、すぐに部屋割り。ぺえぺえの子無し夫婦は四人部屋だが、僕と睦菜は二人部屋を割り当てられた。役職者への配慮なのか、変態の隔離なのか。

荷物を置いて食堂に集合して、すこし豪華な和食。その後は、午後三時から始まるアトラクションまで自由時間。ほとんどの者は海水浴を楽しむ。

ホテルのすぐ後ろが海水浴場になっているので、部屋で水着に着替えて直行。ホテルの

名前を大きく書かれたビーチパラソルが五十本ばかり並べられている。家族で使う組もあれば、四人でまとまっている即席アベックもいた。僕は、わざと睦菜を放り出して、同年代でかたまっているあたりへ紛れ込んだ。

睦菜は波打ち際へ行つて、砂浜に座り込んだ。脚を投げ出して波に洗わせている。ナンパに来ている男なら絶対に声を掛けるだろうが、残念なことに一帯は貸し切りも同然。しかも、独身男性には独身女性があてがわれている。

僕のほうは僕のほうで。飛び切り若い新婚の嫁さんを放り出して、こんなところで何をしているんだと訝しがられている。支店からの参加者も多いので、まずは自己紹介の挨拶。それが済むと、話題も無くなる。係長クラスだと、無任所課長という言葉聞いたこともない者が多い。

「どのような方面のお仕事でしょうか」

「まあ……ドブ浚いとでも言いますか」

そういう相手には、僕も言葉を濁す。部長級となると、ことさらに僕の実務には触れようとする。

「おや。山の神が集まってきましたな」

暇を持て余して海に浸かった睦菜が、年配の奥方ばかり四人に囲まれていた。なにか話しかけられている。声は聞こえないが、想像はつく。露出過剰をやんわり（か、きつくか）たしなめられているのだろう。

睦菜は平然と受け答えをしているのに対して、奥方連中は怒ったり呆れたり戸惑ったりと、表情が揺れ動いている。

そのうち。ひとりが口に手を当てて——ほかの三人も黙り込んだみたいだった。それまでは硬かった睦菜の表情がほころんで、四人を置き去りにして沖へ泳いで行った。

後で睦菜の口から話を聞くと。やはり、服装（と水着）のことだった。

「亭主の好きな赤ビキニって言いますから……」

そこまでなら、颯蹻を買うだけで済んでいたと思うのだが。奥方連を呆れさせたのは、その後の言葉だった。

「こういうのを着ると、旦那様はものすごく喜んでくださって……何も着ていないときよりも、ずっと激しく可愛がってくださいさるんです」

ほんとうはビキニでなくて縄をまとっているときのことを思い浮かべていたと、睦菜は素直に白状したが。まったく何も身に着けていない睦菜を、彼女の言う意味で可愛がったことはないのだから——わざとはしたなく振る舞って、僕に折檻の口実を与えようという下心があつたのかもしれない。

それは、ともかく。いくら開放的な夏とはいえ、真昼間から夫婦生活のことをあつけらかと口にする睦菜に、奥方連は毒気を抜かれたらしい。

毒気を抜かれただけでなくピンク気を吹き込まれたと分かったのは、夜になってからだ。つた。

自由行動の後のアトラクション（ビーチボールを使ったバレーボールとか、定番のスイカ割りとか）を経て、ホテルが準備万端を調えたバーベキューが始まって。さすがに睦菜は僕の傍に侍らせていたのだが、さっきの奥方のうちのひとりに誘われて、既婚女性ばか

りが七、八人もたむろしている片隅へと連れ去られた。

二十分ほども歓談（？）して戻ってきたとき、睦菜は含み笑いをしていた。

「わたしが旦那さまからどんな風に可愛がっていただいているか、あれこれ尋ねられました。縛っていたいただいていることだけは内緒にしましたけれど、お風呂や寝室での出来事は包み隠さず打ち明けたんです」

フェラチオとか『泡踊り』とかアナルとか——貞淑な奥様連中には驚天動地の打ち明け話をしたということだ。睦菜としても。

「旦那様って、とんでもない変態さんだったんですね」

認識を新たにしようだった。

話は、そこでとどまらなかった。

「皆さん、『泡踊り』にすごく興味があるみたいで。説明はしたんですけど、よく分からないとおっしゃって。お風呂場で実演することになったんですよ」

それしきのことで、飲みかけていたビールを噴いたりはしなかったものの。さっきの輪の中には、半世紀を閲^{けみ}して分厚く年輪を重ねた（と、婉曲に表現しておこう）奥様もいた。のしかかられる旦那に同情せざるを得ない。それとも、破れ鍋に綴じ蓋か。

「旦那様のお許しも得ずに決まてしまいました。お仕置きしてください」

それは旅行から帰ってのこととして。実演について、いくつか睦菜をそそのかしておいた。

以下は、拷問蔵で三角木馬に乗せられて自白した睦菜の供述である。途中で鞭をくれてやったり突起を可愛がってやったりときの悲鳴や喘ぎ声は省いてある。

——お風呂場に來られたのは十五人でしたけど、脱衣場に三人が見張りに残りました。モデルになったのは、経営企画部で係長をしている佐伯さんの奥様です。十五人のうちではいちばん若くて二十七です。

エアマットが無いので、洗い場にバスタオルを重ねて敷きました。

わたしがパイパンなのを知って、皆さんびっくりしてました。元から生えていないのではなくて剃っていると言ったら、もつとびっくりしてました。このほうがセックスのとき毛切れしないし、旦那様も可愛いって褒めてくださると言ったら、戦後生まれの子の考えることは分からないって、呆れられました。でも、新鮮な刺激になりそうだから、やってみようかって言う奥様も二人ほどうしやいました。

毛を剃ってしまったら『束子洗い』ができないって注意して、その実演——わたしは真似事ですけど、それから始めました。

腕にタオルをかぶせて、そこに跨って、トルコで教わった通りに、できるだけ上半身は動かさずに腰だけで腕をこすりました。腰の動きがすごく卑猥だと、波多野さんの奥様に褒めて……もらったのでしょうか。波多野さんは、本社の奥様達を束ねてらっしゃる人です。御主人は総務部長さんですから、旦那様の仕事もわたしのことも、ご存じだったみたいです。

脱線しました。『束子洗い』のつぎに、皆さんが知ってた『泡踊り』を実演したんですけど。これは、タオルをかぶせませんでした。うつ伏せになっている憲子さん——佐伯さんの奥様の背中では、いつもと同じにできたんですけど、正面を洗うのは勝手が違いま

した。憲子さんのおっぱいとわたしのおっぱいとがぶつかり合って。なんだか変な気分になりました。

それと。オチンポ様がお股に引つ掛かつてくれないので、何度かずり落ちかけました。皆さんも代わりばんこにやってみませんかと誘いましたけど、駄目でした。

もうひとつの御命令は、ちゃんとやりました。バーベキューで余った——というのは嘘です。くすねました。その丸ごとのソーセージを使って、『潜望鏡』を披露しました。フェラチオのことを知らない奥様も何人かいらして……波多野さんの奥様には叱られました。銀行員の妻が娼婦の真似事をするなんて、とんでもないって。

我慢できずに言い返しました。四十八手という『雁が首』は、娼婦の間夫への操立てですって。でも、言って悲しくなりました。だって、わたし……何人もの殿方にフェラチオをしてるんですもの。

娼婦は滅多なことではキスもフェラチオもしないと教えたのは、もちろん僕だ。

「当然だな。おまえは、妻とは名ばかりの牝奴隷だ。世間一般の尺度で測れば、娼婦以下の存在だ」

三角木馬の頂点に張ったピアノ線にクリトリスを押しつけて、甘い呻き声を絞り出してやりながら付け加える。

「だが、世の中に娼婦は何万人もいる。陸菜は、僕にとつてただ一人のオンナだ」

木槌で木馬の後ろを叩いて、苦悶の絶叫を叫ばせてやった。

——深夜の女湯での講習会（？）は、僕が期待していた展開にはならず、おとなしいままに終わってしまった。

しかし、あちこちに撒いておいた種子がごとく発芽しなかったわけでもない。

社員旅行から四日が過ぎた木曜日。昼食に出ようとしていたところを呼び止められた。

「よろしかったら、ご一緒させてください」

経理課長の吉田だった。年功序列で課長になれたものの、そこで足踏みをしている四十七歳だ。互いに顔を知っているというだけで、挨拶以外の言葉を交わしたこともない。そんな人物が、同格とはいえ年下の僕にすり寄ってくるとは——無任所課長の職掌に絡む事柄か、別口の用事か。

「どこか、お勧めの店がありますか」

吉田の案内で、ブルーカラーあたりは足を踏み入れない小料理屋へ行った。中途半端な格式の店で、僕の趣味には合わない。一膳飯屋か高級料亭（たいていは前者だ）。ふだんはチマチマ、ここ一番で張り込む。睦菜に関しては、張り込んでばかりだが。

二階の小さな座敷に通されて。お堅い銀行の中でも四角定規な部署に勤めているくせに、吉田は昼間からビールを注文した。よほど話にくい相談事らしいと推測したら、当たっていた。僕なら素面で平然と、他人に聞かれていてもそんなに躊躇しない事柄だが。

「夜ごとに奥さんを……なんといいますが、可愛がっておられるとか」

「尾鰭が付いていますね。せいぜい週に三、四回ですよ」

さて、別口のうちでも、どちらの相談だろうか。

「それでも、まさしく絶倫ですよ。私など、月に三度かそこら。しかも、ろくに満足させてやれない体たらく」

女中がビールとお通しを運んでくる。しばらく無言で喉を潤して。

る舞わせたのは、逆説的だが彼女のためだった。一日二十四時間、一年三百六十五日、僕の愛奴でいることに後ろめたさを覚えさせないためだった。となると――吉田の申し出を無碍に断わるのも、これは僕自身が睦菜に対して卑怯なように思う。しかし、あの豆狸を相手では、如何に僕でも勃つ物も勃たないかもしれない。

「すこし、お話をうかがいたいのですが」

吉田の聞作法を尋ねたのだが。なるほど、これでは細君を善がらせることなど出来っこないと、納得した。

キスをして。乳房を一分かそこら（どういうふうにかまでは分からないが）揉んで。淫裂を三十秒ばかりくじつて。いきなり突撃一番。ひたすらに腰を振って数分で射精。終われば、細君に背を向けて自分の後始末。

「若いころに相手をした女は、これで気を遣っていました……」

女ではなく妓だろう。吉田の年齢なら、筆おろしは遊郭に決まっている。商売妓の演技を真に受けてしまったのだ。

つまり細君はまったく未開発ということになる。『四十し盛り』のはずが、鬱々とマグマを溜め込んでいるとは、想像に難くない。

「では、こういうのはどうでしょう……？」

夫婦の貞節を尊重しているようで、しかし考えようによつては夫婦交換よりもアブノーマルな行為を、僕は提案した。夫婦二組が集まって、僕が睦菜を可愛がる。吉田は自分の細君に、睦菜がされている通りのことをする。僕は口を出す（指導する）が、吉田の細君には指一本触れない。これなら、不倫でも不貞でもない。

「なるほど……そのように気を遣っていたいて恐縮です」

睦菜の調教のためにも、変態的行為の間口は広げておいたほうがよい。というのは、自分への言い訳で。実のところ、大年増の豆狸なんか抱きたくないだけのことだ。

性愛指南

盆休みを挟んでは間延びするので、週末にセックス指南の運びとなった。当日は、まっとうなホテルで僕がスイーツを借りて、吉田夫妻はツイン。投宿してからスイーツに集合した。家族でもない四人が一部屋を借りるのは、胡散臭いラブホテルでも御法度のところが多い。

例によつて戦闘諸元を調べて（燃料少な目で潤滑油は若干）、キングサイズのベッドで円巴戦を開始する。最初から全裸は細君には難易度が高いから、下着姿から。

「セックスでは理性などかなぐり捨てて、本能のおもむくままに快楽を追求すべきなのです。しかし、羞恥心がそれを妨げます。羞恥心を封じるには、どうすれば良いかというと、おのれを暗闇の中に置くのです。真つ暗闇の中では、どんな格好をしていようと恥ずかしいでしょう」

怪しげな理屈を押し通して、まず睦菜にアイマスクを着けさせ、ついで吉田も細君にアイマスクをかぶせた。

「暗闇の中でも、恥ずかしいところを触られたりしたら、どうしても遮ろうとします。は

したくない女だと思われたくないという——これも、理性ですね」

手の自由を奪われていては抵抗できない。すくなくとも、自分にそう言い聞かせることができる。僕が睦菜を縛り、吉田がそれを真似る。緊縛ではない。仰臥した身体の下にバスローブの紐を敷いて、身体の側面で手首を縛るだけだ。これだと、手首に体重が掛かることもない。

「闇の中で自由を奪われて、男の好き勝手にされる。こういう状況は、初めてでしょう」
細君は黙って聴いているだけで、うなずきもしない。

「旦那様、やさしく虐めてくださいね」

睦菜がシナリオ通りに、ことさらに甘えた口調で訴える。

「さて、どうするかな」

吉田にうなずき掛けて、愛撫を始める。

睦菜を右、細君を左に並べ、外側に僕と吉田が座る。

身体を横向きにさせてブラジャーのホックをはずし、乳房を露出させる。両手で双つの乳房を（まともに）愛撫する。丘陵全体を掌で包んで軽く揉んでから、指先だけで麓を散策する。

「吉田さん。もっと柔らかく。指で乳房をくぼませては、力の入れ過ぎです」

麓から頂きに向けて、登山道のように螺旋を描いていき、しかし登頂はせずに引き返す。女は緩やかに性感を高めていき、やがては乳首に触れてもらえないもどかしさに身をよじり始める——には、登山道の歩き方が大切だが。

「柔らかい中にも強弱をつけて。相手に指の動きを予測させないこと、常に驚きを与える

ように心がけてください」

じゅうぶんに焦れてきたら、たとえば麓を散策していながら、不意打ちに登頂する。あるいは、両手を片方の乳房に集中して、麓と頂点を同時に攻める。これも十分ちかくは繰り返してから。

指を腹に滑らす。途中で臍を軽くつつくのも、女に驚きを与える意味で好ましい。しかし指が恥丘に達したら、パンティに包まれた中芯は責めず鼠蹊部に迂回する。

「肛門を不意打ちするのもよろしいですが、上級テクニックと心得て、今はやめておきましょう」

講義をしているという意識のせいか、口調が古武術研究会の会長に似てくる。

この焦らしは、あまり繰り返さない。パンティを太腿までずらす。

「羞ずかしい。電気を消してください」

「真っ暗闇の中ですよ。何も見えないでしょう」

細君は反駁しなかった。僕の言葉を受け容れたというよりも、前戯の段階でうろたえるのを忸怩としたのかもしれない。

睦菜の大陰唇をくすぐり、小淫唇をめくるように愛撫する。吉田も、指の細かな動きはともかく、形だけは真似る。

「あんっ……旦那様、もっとオマンコを……お豆もいじってください」

内言としては、クリトリスと淫核を状況で使い分けているが、女に言わせても可愛げがない。『お豆』『びらびら』『おっぱい』『おっぱいの先っぽ』などと言うように仕込んでいる。逆に、そのものズバリは卑語を言わせている。

それはともかく。感じて喘いでいるのは睦菜だけで、細君はほとんど無反応。夫君のテクニクがどうこうではなく、心理的な抵抗が官能を抑圧していると見た。本人は意識していないだろう。

とはいえ、カウンセリングなんて僕にはできないし、そんな時間もない。ならば――落差を狙うか。どんなにたくさん砂糖を使うよりも、ひとつまみの塩を混ぜるほうが、はるかに甘味が増す。鞭の後の愛撫に睦菜が燃え上がるのは――生来のマゾの素質が開花したという、そちらのほうが大きい。

備えあれば憂い無し。あらかじめ用意しておいた小道具を取り出す。ワニグチクリップと洗濯バサミ。洗濯バサミは木製で、嘴の部分が平らになっているのを選んである。しかも、バネのコイルをライターで炙って焼き鈍しておいた。それを吉田に渡す。

「片岡さん、これは……？」

唇に指を立てて黙らせる。

ワニグチクリップを、睦菜の乳首に無雑作に噛ませた。

「ひひひいいっ……！」

不意打ちのせいもあって、切迫した悲鳴が睦菜の口から迸った。

「なに……？ どうしたの？」

吉田の細君が、狼狽の声をあげる。

「ねえ……あなた、教えて」

吉田の手にある洗濯バサミを指差して、その指先を細君の乳首へ宙を滑らせた。

「しかし……」

「大丈夫。僕を信じなさい」

僕の強い口調に気圧されて、吉田がおっかなびっくりで洗濯バサミを細君の乳首に噛ませた。

「ひゃああっ……痛い！」

甲高い悲鳴だったが、驚いただけで痛覚そのものは知れている——それは吉田にも分かったのだろう。落ち着きを取り戻して、細君の反応を見守っている。

「……？」

ふたつ目の洗濯バサミを、僕にかざして目顔で尋ねる。男は誰しも嗜虐願望を秘めている。

ちなみに。男のマゾ願望とは、おのれの中のアニマに対するアニムスの嗜虐だと、僕は解釈している。サディスチンについては——僕は女ではないから、理解の外にある。

いや——弟子を前にして思索に耽るのは、よろしくない。

僕は行動で吉田の間に答えた。つまり、ふたつ目のワニグチクリップを、睦菜のもう一方の乳首に噛ませた。

「ひい……」

何をされるか分かっているのに、余裕の悲鳴だった。

「これは上級テクニクですから、あなた方にはまだ早い」

ワニグチクリップを指で弾いて、さらに悲鳴を絞り出す。

しかし睦菜は、赦しを乞わない。騒々しいのは細君のほうだ。

「な、なにをなさっているんですの？ あなた、これを取ってちょうだい。ねえ……」

あまり焦らしても逆効果と判断して。

「では、ぼつぼつ赦してやりましょうか」

あつさりとワニグチクリップをはずしてやった。

「飴と鞭ですからね。さっきよりも優しく、入念に可愛がってあげてください」

右の乳首を指で転がしながら、左の乳首を唇でついばむ。舌先でつつく。

吉田も、きっちり真似る。

「え……？ あ、はああ」

細君の口から、ようやくにかすかな喘ぎが漏れた。

僕は空いているほうの手にワニグチクリップを握って、クリトリスをつついた。

金属の冷たく硬い感触に、びくっと睦菜の裸身が震えた。

「……？」

吉田が首をかしげながら淫裂の頂点に洗濯バサミを近づけるが、どこをつついたものか攻めあぐねている。まさかとは思ったが……そういえば、股間を攻めたときもそこを特に意識しているふうではなかった。

「割れ目の合わさっているあたりに小さな盛り上がりがあるでしょう。そこをクリトリスといいます。女の急所ですよ」

「……？」

吉田はあやふやな手つきで、それでもちゃんとクリトリスに洗濯バサミを押しつけた。細君がうろたえる。

「いやよ。そ、そんなところを触らないで！」

よく見てみると目顔で吉田を促して。睦菜のクリトリスを包皮ごとつまんで、きゅるんと実核を押し込んだ。

「ひゃんっ……」

息を吸い込むような小さく艶めかしい悲鳴だったが、どこことなく不満そうにも聞こえた。
「へええ……」

吉田が嘆息した。意を決したといったふうに、小さな盛り上がりをつまんだ。そして、わずかに指を滑らせた。

「びゃひゃあっ……!!」

細君の腰が大きく跳ねた。

「な、なに……これ？」

クリトリスの存在など、学校では教えてくれない。娼婦だって、気を遣らされるのが嫌で、自分から進んで客に求めたりはしない者が多い。しかし、それにしても。二十年ちかく夫婦生活を重ねれば、おのずと発見できそうなものを。如何に吉田のセックスが十年一日だったかが分かるというものだ。そして、探求心にも乏しい。知らなければ知らなかったで、睦菜が『お豆』と口走ったときに、疑問を持ってしかるべきだと思う。

細君も知らなかったか、あるいはセックスとクリトリスとは別物だと思っていたのか。ともかく、細君の攻略が一気に楽になった。

「クリトリスこそが、快感のボタンですよ。日本語ではインカクとかサネとかいいます。睦菜が言っていたようにオマメと呼ぶ女性もいますね」

胎児が男女に分化するときは、ここがペニスに成長するのだとも説明して。小学生時代

の甘酸っぱい記憶が甦った。悪ガキが三人でひとりの女の子を囲んで、虐めるとかいっただけ意識は無く、座っている椅子を叩いたり揺すったりしていたときだ。彼女が突然に立ち上がって、言い放った。

「オチンチンがくすぐったいから、やめて！」

僕たちは気を吞まれて、それでも（僕ではない）ひとりが言い返した。

「女にチンポが付いてるもんか」

「あるよ。見せてあげる！」

彼女は短いスカートをたくし上げて——そこでチャイムが鳴って、うやむやになった。今となっては、どんなパンツだったかすら覚えていない。

男の子は椅子が揺れたくらいでは、オチンチンはびくともしない。女の身体は男よりずっと敏感だと知り初めたのは、このときだ。

おませな女兒なら知っている事柄を四十女に教えるのは、どうにも面映ゆかったのだが——クリトリスをしごかれて裏返った悲鳴をあげるのを見るのは、ちょっとした善行を積んだ気分になる。僕がいなければ、彼女は生涯女の悦びを知らずに終わったかも知れないのだから。

細君の女性器を詳しく観察すると。クリトリスは小さめで、ふだんは埋もれているらしい。小用の後で拭くときに紙の端が触れて、その存在に気づく。そういったこともなかったのだろう。クリトリス性感を呼び覚まされたのは、初めてかもしれない。

「い、いや……なんだか、変。変になります。あなた、やめて……もう、嫌あつ……」

吉田の手が止まった。僕は吉田に顔を近づけて、ゆっくりと首を横に振る。指でクリト

リスをつつくような仕草をして、続行をうながす。

「ほんとうに嫌なときは、冷たく短く『ヤメテ』としか言いませんよ」

細君に聞かれないように、耳元でささやいてやった。

そんなものかね？　といった顔で、吉田はクリトリスへの刺激を続ける。

「これにも緩急をつけて。そのうち実核が顔を覗かせてきたら、皮を剥き下げてやるのもよろしい。男に真性包茎があるように、どうしても剥けない女性もいるから、そこは反応を見ながら」

睦菜のクリトリスを、つるんと剥いてやった。

「ひやうんっ……旦那様、いつものように、もっと……虐めてください」

「こら。今日は、そういうことはしないと云ってあるだろ。不満かも知れないが、普通にたっぷり可愛がつてやる」

「はあい……」

素直な返事だが、口をとがらせている。

普通に（僕と睦菜のあいだでは、普通が普通でないのだが）満足させてやるとも。睦菜の脚からパンティを抜き取り、開脚させる。

吉田はてこずっている。太腿に手を掛けて割り開こうとしても、細君が脚を突っ張って拒んでいる。

「奥さん。セックスの悦びを知りたいのでしょうか。それには、理性や羞恥を捨て去って、肉体を本能に委ねなさい」

ようやく、天岩戸がわずかに開いた。

睦菜のほうは、とつくに脚を開いて膝を立てて、僕を待っている。その中芯に顔をくっつけて、クリトリスを口に含んだ。

「ええっ……?!」

キスでさえも、とびきりの褒美だ。クンニリングスなど、十三か月目の『初めて』だった。

ちゅう、ちゅうぷつ、ちゅうう。音を立てて吸ってやった。

「ひゃああっ……んんーっ」

睦菜が腰を突き上げて、がくがく震わせる。

「浅いのが……浅いのが、来る、来ちゃいますうう!」

初めて聞く表現だった。重厚な膣性感に比してクリトリス性感は尖鋭だと――睦菜の反応で、僕も実感している。そのことを言い表わそうとしているのだろう。

「逝け、吉田の奥さんに、女の絶頂を教えてあげろ」

しゃべっているあいだは、指で激しくクリトリスをしごく。メコ筋打ちにも耐える睦菜だ。絶頂を目前にしては、つねろうと引つ張ろうとデコピンを食らわそうと、すべてが快感に結びつく。

「あああっ……もつと……もつと強く。旦那様ああっ……!!」

しかし、最後まで追い込まない。

「ぼけっとならないで。同じようにやりなさい」

年長者への言葉づかいではないと反省したのは、言ってしまったからだった。

吉田は気を吞まれたように、細君の股間におおいかぶさって。小さなクリトリスを唇に

はさんで、ずじゅううと吸った。

「ひやあああつ……?!」

細君が、魂消^{たまげ}るといふ表記がふさわしい悲鳴をあげる。

「そんなこと……汚ない。やめてください……」

吉田は、かまわずに吸い続ける。手を添えて包皮を（剥き下げるのは難しいらしく）押し下げ、先端を舌でつつく。細君の反応に触発されたのか、僕の喝が効いたのか。一心不乱だ。

細君の反応も驚愕から官能へと様変わりしていく。

「やめて。汚いし……ああつ……嫌よ。なんだか、変に……くうう……」

クリトリスだけでアクメに追いやると、ことに普通のセックスでは、男の存在意義がなくなる。
Raison d'être

「吉田さん。クリトリスは常に指で刺激しながら、とどめを刺すのです」

睦菜におおいかぶさり、左手で上体を支えながら右手はクリトリスを、いわばアイドリング運転にしておいて、腰で探ってペニスを打ち込んだ。

「掌の底を自分の腹に押しつけて、指でクリトリスを挟んで、そのままピストンするので。ピストンに合わせて、指を閉じたり開いたりして緩急をつけるのも効果的です」

お手本を示して見せる。

「ああつ……旦那様、いいです。もっと強く……睦菜を滅茶苦茶にしてください」

艶めかしい声に刺激されて、吉田が細君に……挿入しようとして、うまくいかない。

「挿入の瞬間だけは、クリトリスから手を放してもよいですよ」

吉田は、かなり軟らかい怒張に右手を添えて、無事に挿入を果たした。七年後にも、僕はこんな無様を晒したくないものだ。

睦菜の嬌声に刺激されたのは吉田だけではない。細君も、睦菜と競うようにアクメへの坂道を登っていく。

「ああっ……なに、これ？ 身体が宙に……もう、分かりました。これが、それなんです。分かったから……もう、やめてください」

「まだまだ」

吉田と細君と、ふたりを叱咤激励する。

「奥さんは、まだ五合目にも達していない。七合目くらいまでは九浅一深がよろしい」

身体を起こして、右手の使い方を吉田に見せる。V字形に開いた指の根元でクリトリスを挟んで、指の先はペニスに添える。つい根元まで突き挿れてしまいがちな初心者には有効な（かもしれない）ストップパーだ。

「せいぜいペニスの中ほどまでしか挿入しないようにして、九回でも五回でもよろしいが、浅く早くピストンして……」

ぐっ、ぐっ、ぐっと抽挿する。睾丸が会淫に当たって生じる『パンパン節』は鳴らさない。

「そして、右手を引いて、下腹部が密着するまで深く打ち込む」
ずぐうっと突き挿れる。

「はああっ……ん」

「獅子欺かざる。まして、牝の獣を仕留めるには全力を傾注するのです。継続は力です」

女を追いつ上げるまでは射精を我慢しろと言われるよりも、深甚な極意を伝授された気分になるだろう。

睦菜は、今すぐにでも登頂できる位置にまで達している。僕は睦菜ではなく、吉田の細君の反応に注意しながら、九浅一深を繰り返した。

「もう……もう……やめて。身体が宙に浮いて……あああつ……落ちる……怖い！」
喘ぎ声が悲鳴に変わった。

「奥さんも仕上がってきましたな。ここからは、クリトリスに指を添えたまま、遮二無二突貫あるのみです」

ピッチを上げて、ひと突きひと突きを奥深くまでえぐり挿れる。

「いいいっ……翔ぶ……翔んじやうっ……」

睦菜が頂点に達する。しかし山頂に片足を踏み込んだだけで、そこを蹴って虚空へ翔ぶ気配はない。もつと厳しく縛られ、大量の塩にまぶされながらでないと、官能の蜜味を貪れない体質になっている。

それでも、これだけ本気の絶唱を耳にしたことのある男は、そんなに多くないと思う。僕のまわりでは別だが、女性向けにせよ男性向けにせよ、雑誌の幼稚なセックス特集を読むかぎりは、そうらしい。

細君も睦菜の（まだまだ可憐な）善がり声に刺激されて、もちろん夫君の頑張りもあつて、アクメの坂を押し上げられていく。

「なに、これ……？ 変よ……宙に浮いてる、落ちてる……怖い。お願い、もう……もう駄目！ 駄目ですうう！」

不意に静かになった。まさか失神——では、なかった。夫君のほうがバテて、動きを止めていた。細君は、絶頂を目前に放り出されたとは気づいていない。アイマスクで表情は分らないが、口元が幸せそうにほころんでいた。

拘束をほどいてアイマスクも取り去ってやり、睦菜に添い寝して抱き締めてやる。

「事が終わって、すぐ背を向けるようでは、恨まれますよ」

射精と同時に醒める男と、情事の余韻に浸る女性との違いを、講釈しておく。

「だから、縛ったまま放置してやっているんだ」とは、吉田夫婦に聞こえないよう、睦菜の耳にだけささやいた言葉だった。

——結局、吉田の細君が到達したのは、頂上のすぐ下にある見晴台のあたりまでだった。それまでは三合目にも足を踏み入れてなかったのだから、じゅうぶんにめくるめく体験ではあっただろう。

おかげで、吉田からはずいぶんと恨まれてしまった。

「三日と明けずに、こっちの布団に潜り込んで来るようになったよ。若い娘にねだられたって、そうそう勃つもんじゃない。まして、古女房だぜ。どうにか週末ごとで納得させたがね。おかげで、ゴルフのスコアが10は落ちたよ」

土曜の夜に腰を使い過ぎるという意味だ。

二十数年分の欲求不満を解消させられる吉田には、同情を禁じ得ない。とはいえ、身から出た錆でもあるし、今さらながらの新婚気分も悪くないはずだ。

早熟義妹

ここだけの話というやつも、いつの間にかあちこちに広まってしまふ。九月から年末にかけて、さらに都合七組の夫婦にセックス指南をほどこして。性豪とかセクスパートとかの称号を一部の既婚男性から奉られてしまった。

お堅い銀行員にとつては命取りになりかねない事態だが、裏仕事が主体の無任所課長には、むしろ保険の意味でありがたい。前頭取の不祥事では、お飾りに天下ってきた新頭取を差し置いて実権を握った副頭取に美少年を献上して、あやうく首をつないだが。閨事情まで知っている男を切り捨てる動きには、組織の中堅どころを占める八人（これから、もっと増えるだろう）の弟子たちが、（僕の自暴自棄の暴露を怖れて）ささやかな抵抗を發揮してくれると期待しても良いのではないだろうか。

——話を進め過ぎた。最初のセックス指南が終わった直後に時を戻そう。

睦菜の調教は、ここのところ、いうなれば高原状況にあった。最初の急上昇は年が明けてからはなだらかになり、今現在ではわずかな勾配に落ち着いている。これから五年十年、それ以上の歳月が待っているのだ。どんどん突っ走って行くと、どこに辿り着くのか、それを考えるのが怖かった。もともと。たとえば五年後に（パイプカットを元に戻して）子供を設け、数年間は子育てに専念させて、子供が学校に通うところから調教を再開するといふ運び方もある——というのは、実は強がりだった。

ここまでは、睦菜は僕を信頼してついて来てくれた。しかし、おのずと限界があるのではないだろうか。極端な例だし、僕としても実践するつもりは（今のところ）ないが。全身に刺青を彫るなどは、断固拒否されるかもしれない。本心からの拒絶は、拷問でどううできるものではない。それをすれば、現在の関係——加虐と被虐の両極を結んで通底する、愛情でも信頼でも、なんと呼んでもかまわないが、それを破壊してしまう。掌中の珠を砕いてしまうのではないか。それが怖かった。

盆休みの前半はデートを楽しんだ。超ミニスカートの袖無しワンピース一枚で遊園地へ連れ出して、空中ブランコに乗ったり、射的で身を乗り出させたり。丸いゴムボートでの溪流下りで、ずぶ濡れ（もちろん透け透け）にさせたのが、いちばん面白かった。

映画も観に行った。成人映画ではなく、ラブロマンスでもなく、バレーボールを題材にした少女漫画のアニメ版だ。睦菜には学生時代の制服を着せた。ジャンパースカートだが、小学生かというくらいまでスカート丈は切り詰めさせた。もちろん、下着もブラウスも無し。親子連れの観客ばかりの中で、僕たちはどんなふうに見られていただろうか。年齢的には父と娘。しかし、半裸の少女を堂々と連れ回す父親など、いるはずもない（だろうか？）。睦菜も館内が明るいうちは居心地悪そうにしていたが、映画が始まると、まるきり年齢相応の少女に還って、夢中になってスクリーンを見詰めていた。たまには、こういうのもいいだろうと——スカートの中に手を這わすのはよしておいた。

盆休みの後半からは、一週間ほど放し飼いにした。睦菜だけの里帰りだ。おとなしい（膝上十五センチ）サマーワンピースを新調してやったのだが、帰宅したときの服装は、社員

旅行のときのものだった。まさか、その格好で実家を出たのではないだろう。駅のトイレあたりで着替えたのかもしれない。

しかし、その殊勝な心掛けを愛でる余裕が、そのときの僕にはなかった。玄関口に立った睦菜の背中に隠れるようにして、もうひとりの少女がそこにいたからだ。

「こんにちは。お邪魔します」

緊張した面持ちでぺこんとお辞儀をした少女は、睦菜の二学年下の妹、美津子だった。ちなみに、義妹の名前も誕生日（三月五日）にちなんでいるから、厳密には二歳と九か月の差がある。おかつぱに似た髪形だが、微妙な段差があったりするから、ボブというやつだろうが、ちつともおとなっぽくはない。ぱつと見た感じでは、睦菜より五つくらいは幼い印象だ。

「美津子のことで、お願いがあります。聞いていただけますか？」

とりあえず、リビングに通す。睦菜が台所へ立ってサイダーを持ってくる数分のあいだに、考えをめぐらせた。

第一に、睦菜の服装だ。わざわざワンピースを新調してやったというのに、まともな少女でも人妻でも、いや娼婦でさえもためらうような露出を妹に見せつけるとは、どういうつもりだろうか。美津子のほうは、至極まともな制服。睦菜と同じ学校だから、水色のジャンパースカート。もちろん、ブラウスを着ているし、スカート丈もまともだ。

応接テーブルにコップが三つ並んだ。こちらにひとつと、あちらにふたつ。

美津子が僕と正対して座り、睦菜はそこに寄り添うといった感じ。美津子はうつむいて、コップに手を伸ばそうとしない。三十秒ほど、沈黙が続く。

「あなたの口から、きちんと旦那様をお願いするのよ」

おや、と思った。いつもの睦菜とは口調が違う。僕に対するのと妹に対するのでは違っていて当然だが——僕がよく知っている女性と似ている。

「兄は工業高専を卒業して、父の工場を手伝っています。父も母も、あたしに経理を手伝ってほしくて、商業校へ進学させようとしています」

姉の睦菜は進学を諦めて、僕への供物になった。工場の経営が楽になってきたとはいえ、美津子だけを優遇するのは上のふたりが可哀そうだと、そう考える親もいるだろう。末子それも女の子を溺愛する親馬鹿もいるが。

「あたし、ほんとには音楽科へ行きたいんです。できたら、東京がいいんですけど、すごくお金がかかるんで……こっちにある学校で、我慢します」

「こら」

睦菜が、妹の太腿を（スカート越しに）ぴしゃんと叩いた。

「そういう言い方、旦那様に失礼でしょ」

両親を説得してほしいとか、そういった話ではなさそうだ。

「あたし、アイドル歌手になりたいんです」

多くの少女が一度は抱く夢。それを叶えられるのは、ごく少数。

美津子の話を要約すると。東京ならスカウトのチャンスもあるけれど、それは諦めるとしても、声楽をきちんと学んでから上京して、事務所に売り込むなりオーディションに応募するなり。こちらの私立校には絶対に受かる。しかし、高い学費を親が出してくれそうもない。卒業までのあいだ、僕に援助してほしい。だけでなく、同居もさせてほしい。

いくら僕が嫁を寵愛しているにしても、虫の良すぎる願い——では、なかった。

「あたし……姉から、お義兄さんのことを聞いています。あたしを、姉と同じに扱ってください」

こういう話の場にサイダーなんか出すんじゃない。口に含んでいたら、派手に嘔き出すところだった。冗談は、さておき。

僕は睦菜に視線を転じた。

「僕のことを話したというのは……なにもかもか？」

睦菜は、こくんとうなずいた。

美津子は、言ってしまった言葉の意味にあらためて気づいたかのように、顔を真っ赤にしてうつむいている。

「だから、この服を着て戻りました」

「……………」

「この子、もう処女じゃないんです」

「お姉ちゃん。あたしに言わせて。二年のとき、夏に……音楽の先生と。あ、違うんです。推薦が欲しくてとか、そういうんじゃないくて」

二十六のハンサムな独身で、女子生徒のあいだではひそかな争奪戦が繰り広げられていたそう。具体的なことまでは僕に打ち明けなかったが、『強引に』迫ってモノにしたとか。彼女だけでなく、音楽教師の『愛人』はほかにも何人かいるそうだから、まったくんだ性職者もあつたものだ。などと、他人のことは言えないが。

だから気兼ねなく、二号さんでも二人目の愛奴にでもしてくださいと、美津子は言う。

「睦菜は……平気なのか？」

ためらうふうもなく、睦菜は大きくうなずいた。

「……………」

僕は長いこと黙り込んでいた。あれこれの考えが頭の中で渦巻き、收拾がつかない。睦菜が僕との夫婦生活をすべて妹に打ち明けた動機は措くとして。

それを知ったうえで、美津子は自分を姉と同じに扱ってほしい（というのではなく、かまわない、だろう）と言う。つまり、それが学費の援助と住まいの提供の見返りだ。処女でないと自白したのは——抱けば分かることとはいえ、僕の罪悪感をすこしでも減らそうという思惑か。姉妹井SMというインモラルに比べれば、微々たるものだが。

もしかすると。睦菜は妹に対して、自分を菊枝に擬そうとしているのだろうか。それが、さっきの口調だ。それならそれで、姉に妹を（レズでもSMでも）責めさせるといってもはや淫モラルとしかいえない構図もありえる。

三歳ちかい差があるし、見た目にはもつと歳が離れている印象だが、美津子が『女』になったのは、姉と機を一にしていると聞かされては、おのずと印象が変わってくる。ならば、二匹（自然と、こういう助数詞が頭に浮かんだ）並べて悲鳴の合唱を聞くのも面白い。

とはいえ。美津子は学校に通うのだから。身体に傷が残るような厳しい責めは、長期休暇中に限られる。いや、私立校だ。うちの銀行と取引があれば、無任所課長の横車を押し通せるかもしれない。

……考えばかり先走っても駄目だ。もつとも、先走り汗がにじんでいるのを感じるくらいだから、結論は出ているようなものだが。美津子の覚悟がどれほどのものか、それを見

定めてからでも遅くはない。

「話は分かった。美津子は僕に身を売って、学費と生活費を稼ぎたいというんだね」

美津子が、はつと顔を上げた。羞恥の色の中にも、屈辱に甘んじる陶酔がにじんでいる——と見たのは、僕の主観にしか過ぎないだろう。

「……はい」

美津子は小さな声で、しかし、はつきりと答えた。

「では、売り物の身体を見せてもらおう」

美津子が、すぱつと立ち上がった。テーブルを挟んで僕の目の前で、脇のチャックを下ろし、肩のスナップをはずした。てきぱきとジャンパースカートを脱ぎ、ブラウスのボタンをはずしていく。

平然としているようで、内心はガチガチなのだろう。脱いだ衣服をたたまず、そのままソファに置く。シュミーズは床に落としたまま。

さすがに、そこで動きが停滞した。残るはパンティのみ。結婚当時の睦菜よりもバストは発達している。それなのにブラジャーを着けていないのは、姉から吹き込まれたのかもしれない。しかしそれにしては、臍下まである女兒向けのパンツを履いている。セックスアピールなど意識していないのか、それとも幼さに食指を動かす男もいて、僕もそのひとりだと、これも姉から吹き込まれた知恵なのか。

「……」

美津子は両手で胸を隠して、僕から視線をそらせてたたずんでいる。

僕は、黙って美津子の半裸を観察している。

根負けするのは美津子だ。おずおずと両手を下ろして、パンツに親指を掛けた。男を焦らす脱ぎ方を心得ている。音楽教師に抱かれたのは、一度や二度ではあるまい。しかし、親指を掛けると――やはり一気に引き下げた。姉と違って自然にまかせている繁茂に、僕の視線は吸い寄せられてしまった。自然にまかせているとはいえ、三十路四十路の奥様連中とは違って、清楚な印象だ。

パンツも床に落としたまま、美津子は直立不動の姿勢をとった。胸も股間も隠さない。なかなかの覚悟だ。

「睦菜。麻縄を持つてこい」

リビングにも寝室にも縄は常備しているが、最近では肌触りの優しい縄には（睦菜が、口には出さないが）飽きて、もっぱら荒縄を使っていた。麻縄は、拷問蔵にしか置いてない。

睦菜が麻縄を取りに行っているあいだに、僕は品定めをしておく。

「僕の前に立つときの姿勢までは、睦菜から聞いていないようだな」

僕も立ち上がって、テーブルの無い場所へ動いた。僕の正面に美津子を立たせて、両手を頭の後ろで組む捕虜のポーズを教えてやる。

右手を乳房に伸ばしても、全身を緊張させはするが、逃げようとはしない。

掌で掬い上げ、重さを計るように持ち上げてみる。今の睦月と同じ年齢になったときには、かなりなグラマーに成長しているだろうと確信させるだけのボリュームがあった。

どんな反応をするか、ぞくぞくしながら驚掴みにした。

「くうう……」

顔をしかめて呻いたが、やはり逃げない。「やめて」とも言わない。よほど姉から言い聞かされているのか、それともマゾっ気が強いのか。

乳房を左手に持ち替えて、右手は股間を下から穿った。潤うを超えて濡れている。そのせいもあって、最初から指は三本が簡単に挿入^{はい}した。中で指を広げて、こねくる。指の根元に、きつい収縮を感じた。

「これだけ馴染られて、平気なのか？」

「痛いんです。羞ずかしいです。でも……縄で縛られたり鞭で叩かれたりするんでしょ。これくらい、なんでもありません」

学費を援助してもらうための交換条件と割り切っているのか、マゾ性向なのか、まだ判断できない。

僕は美津子の後ろにまわった。

「経験済みは分かったが、こちらはどうか？」

尻の谷間の奥深くまで指を這わせた。

びくんと、跳び上がるほどに反応した。それだけで、処女穴と分かる。

「あたしと先生とは……そんな変態みたいなこと、してません」

「変態みたいじゃなくて、変態そのものの行為を、卒業までされるんだよ？」

予想に反して、美津子の身体から緊張が（すこしだけ）抜けた。

「卒業したら、おしまいにしてくれるんですね」

後々まで性奴隷として扱われるかもしれないと——怖れていたのか、期待していたのか。睦菜が戻ってきたので、戸惑いは棚上げにできた、のだが。

睦菜は、初めて見る装いをしていた。いつの間に買っていたのか、黒いガーターベルトで黒いストッキングを吊って、黒いピンヒールを履いていた。無毛の股間は剥き出しのくせに、ハーフカップの黒いブラジャーを着けている。

「縄を持って参りました」

ひざまずいて、両手で縄を捧げる。その仕種だけを見れば、従順なマゾそのものだが？
とりあえず、美津子に専念する。

ひざまずかせ、手を後ろにねじ上げて高手小手に縛った。

「あ……くうう」

年齢に似つかわしくない、艶かしい呻きを漏らす美津子。縄に酔っている。睦菜よりも、よほどマゾの素質に恵まれている。善男善女なら、呪われていると表現するかも知れないが。

こうなってくると……アイドルとか声楽科は口実で。マゾとして調教されたいというのが、本音かもしれない。それも、僕の伝手で信頼できるパトロンを紹介してくれというのではなく、姉と一緒に責められることを望んで……。

まさか。好きな男にキスをされただけで舞い上がる年頃の少女が、そんな淫らで破廉恥でアブノーマルで淫モラルな願望を……。

いや、そうとも決めつけられない。僕が美津子の歳には、もっと過激な欲望に悶々としていたのではなかったか。そして、それは。時代のせいもあつたが、実行を伴わない妄想に過ぎなかった。

美津子が直面しているのは、妄想ではなく現実だ。現実が牙を剥くとき、この早熟な義

妹はどう振る舞うだろうか。妄想ばかりが先走っているだけで、一発の鞭にも泣きを入れるということも、あり得なくはない。

それなら、それで。美津子を諭して、両親の敷いたレールの上に戻してやるだけのことだ。僕と睦菜のＳＭ生活は、これまで通りに続く。

しかし、そんなありきたりの結末を睦菜は望んでいないのではないか。それが、サディスチンに擬した黒ずくめの扮装の意味ではなからうか。

美津子が鞭に耐え、三角木馬にも五分や十分は乗っていられたら……どうしたものだろうか。

「立て」

縄尻で、美津子の肩を厳しく打ち据えた。

「キヤあつ……」

驚愕の悲鳴だが、拒絶には聞こえなかった。

二発目をくれてやる前に、美津子は立ち上がった。脚はしゃんと立っているのに、上体がわずかに揺れている。睦菜は、こんな反応をしたことがない。記憶を遡れば『土鈴愛好会』の梢恵が、こんなふうだったか。縄に酔い鞭に陶醉した、底無しのマゾ牝だった。

手首を縛って余らせておいた縄尻を、後ろから股間に通した。斜め上に引いて、淫裂に食い込ませる。

「あ……」

刺激から逃れようとしてか、美津子は腰を後ろに引いた。ので、ますます縄が食い込む。

「これから試験をしてやる」

「……………」

美津子が顔を上げて、僕を見た。言葉の意味を理解している眼差しだった。

縄を引くと、へっぴり腰のまま、素直に前へ歩く。リビングを出て台所を突っ切って、裏口から外へ引き出した。それでも、美津子について来る。板塀に隣家の視線を遮られていると（姉に聞かされて）知っていたとしても、素裸で、しかも縄打たれて屋外へ出るなど、並の神経を持った女には恥辱の極みだろう。

睦菜も最初から素直に引き出されてはいたが、酒席に裸ジャンパースカートの制服で侍ったり、赤の他人に花電車芸を披露したりして、露出に馴致された後のことだ。

よほどマゾ性向が強いのか。姉に話を聞かされても、恥辱と苦痛（と、悦虐）とを実感できない故の平然なのか。

まずは、宙吊りにして鞭打ってみるか。いや、その前に。おどろおどろしい道具立てを見て、どんな反応を示すだろうか。

義妹は、きっとこの『試験』に合格するだろう。

そんな確信を胸に抱きながら、僕は拷問蔵の戸を引き開ける。

「 完 」

後書き

この手のエンディングは、『初心妻奴隷志願』『未性熟処女の強制足入れ婚』に続いて三回目です。十年以上昔の作品ですから、マンネリでもないですね。

義妹への『試験』を書いていけば、あと五十枚は伸びるし、姉妹SM井まで書けば二百枚とか続くでしょう。とはいえ、似たような責めの繰り返しになること必定です。

筆者にとって、エロ小説の執筆はゲームのプレイと似ています。序盤の苦労がいちばん面白くて、中盤以降は単純な規模拡大になっていきます。だからゲームでは、途中から仲間が増えていくとか、徒歩から船、鳥と移動手段が変化するとか、あれこれ工夫がされているでしょう。潜水艦まで加わったやつは、複雑になり過ぎて放り投げましたけれど。筆者もそれなりの工夫はしているつもりですが。

ぶっちゃけ、新婚旅行が終わったところで、作品としてはべてしまっても良かったようなものです。しかしそれでは、やはり物足りないので、延々と描き続けてしまうのです。というわけで。今回は最後の百枚余を体験版としてみたのです。体験版が愉しめた読者は、製品版でG線上のアレヤコレヤを満喫できるでしょう。体験版がイマイチだった読者も、製品版に期待してください。どっちにしろ、買ってくださいいねというお願いでした。

2021年10月

著者…濠門長恭

表紙絵…藤間慎三

発行…SMX工房

ブログ：<http://goumonchoukyou.jp/>